

# 月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.133

ミリアムに新たな衣装替えが追加！
『英雄伝説 暁の軌跡』

《漆黒の牙》vs.《剣帝》、運命の対決
英雄伝説
空の軌跡SC
～絆の在り処～

ファルコムニュース
『軌跡』シリーズだからこそできる
新感覚書籍！
魔法少女
まじかる☆アリサ
決定稿

ファル学でまさかの温泉回!?
も～っと集まれ！
ファルコム学園

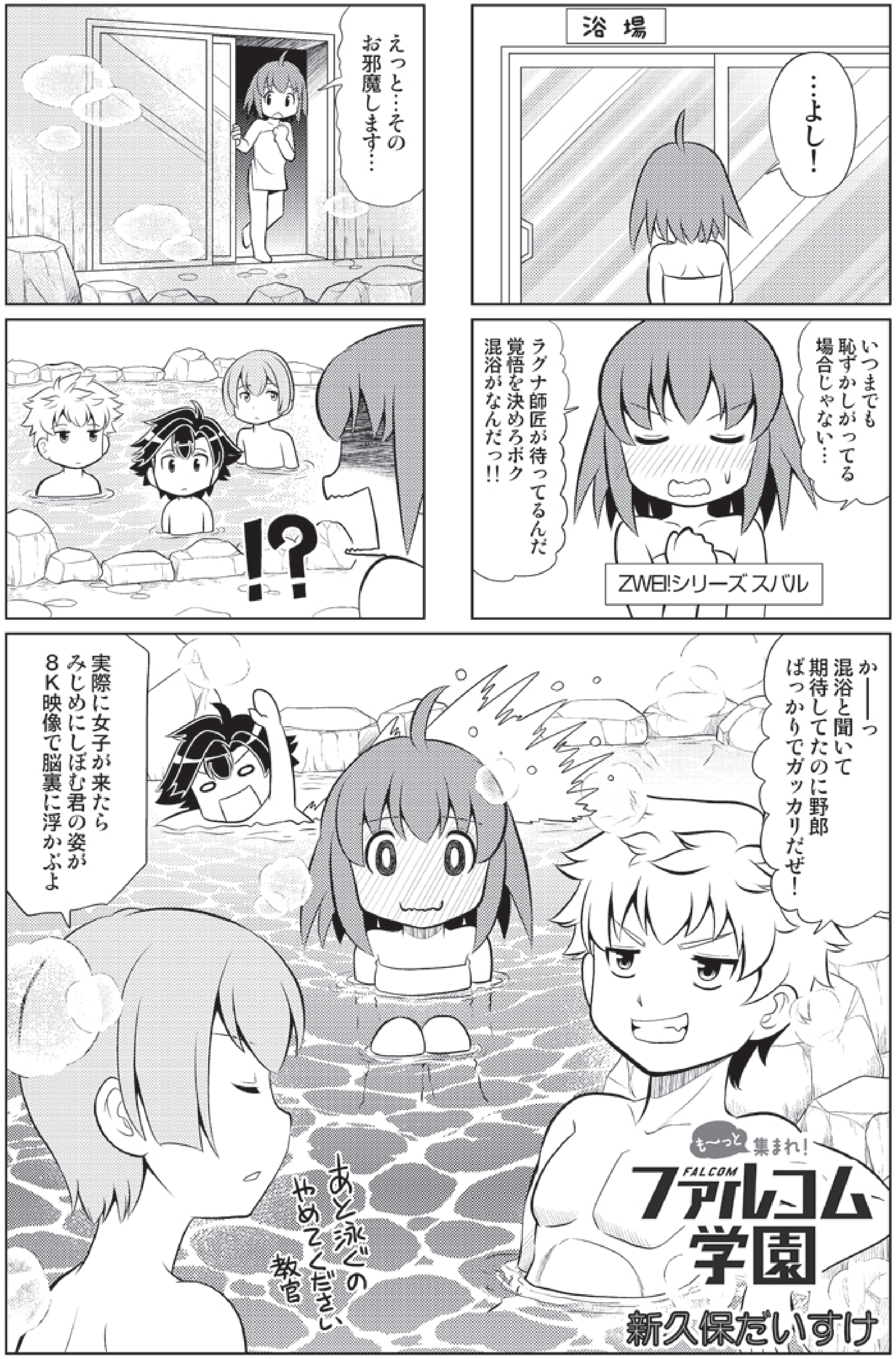
イアンとの再会、その口から発せられた言葉とは
# 創の軌跡
# THE MISERABLE SINNERS



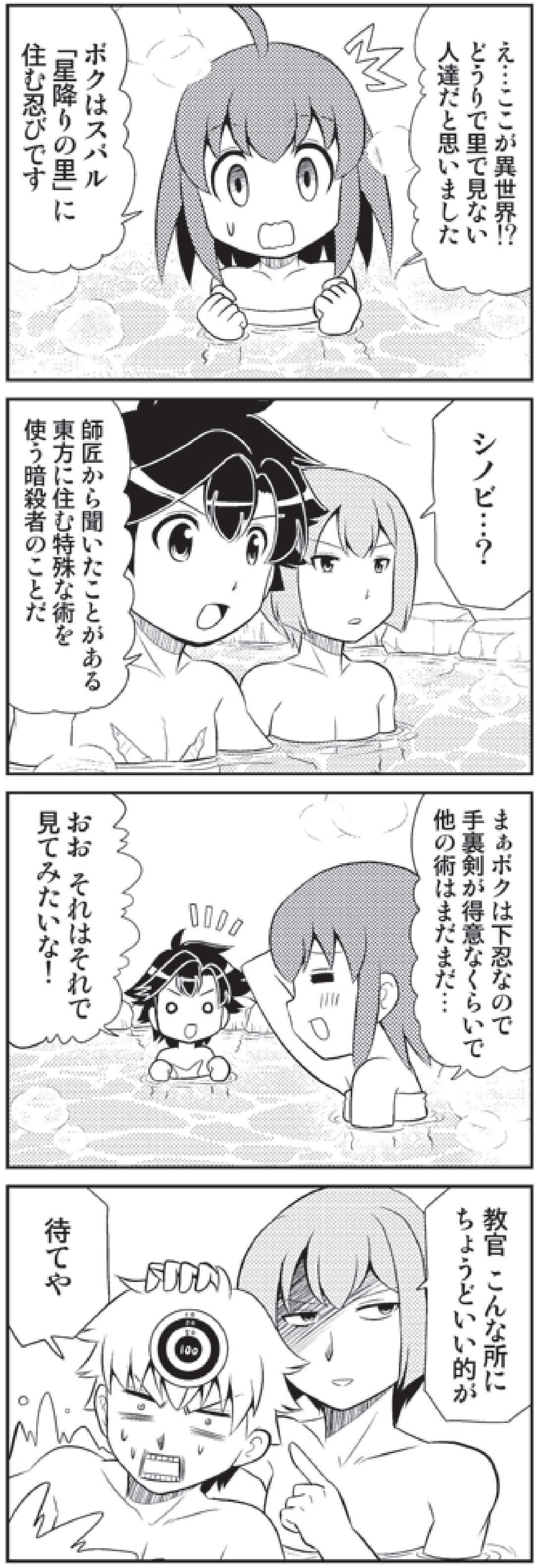
FALCOM MAGAZINE

# CONTENTS

★混浴もいまや漫画でしか見ないシチュエーション★



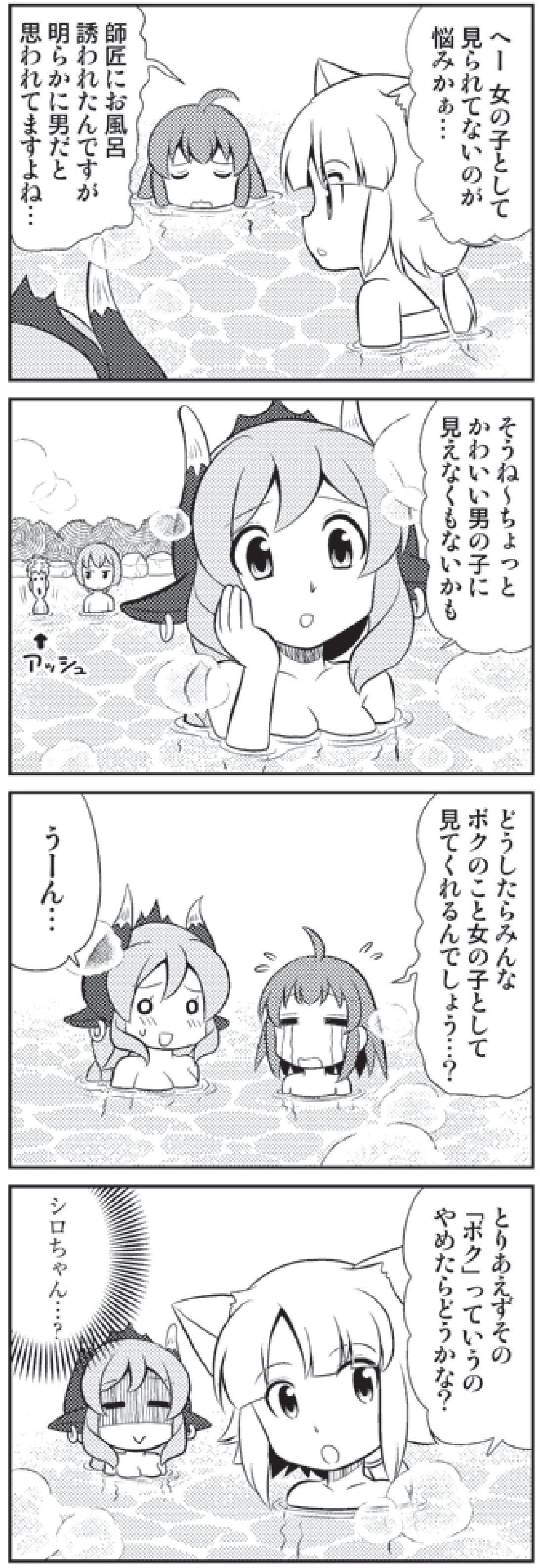

## 忍びと手裏剣



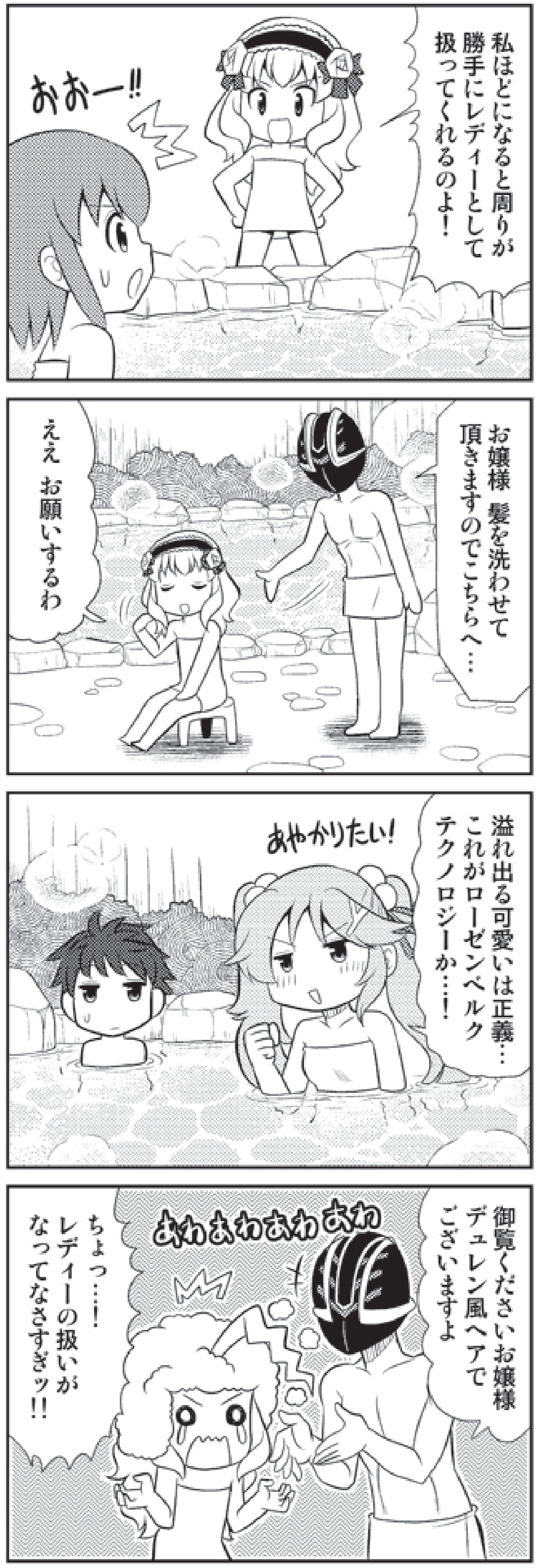

## だって女の子だもん



## ボクからのアドバイス




## レディの扱い




## 闇の住人の教え




## 台無しの教官



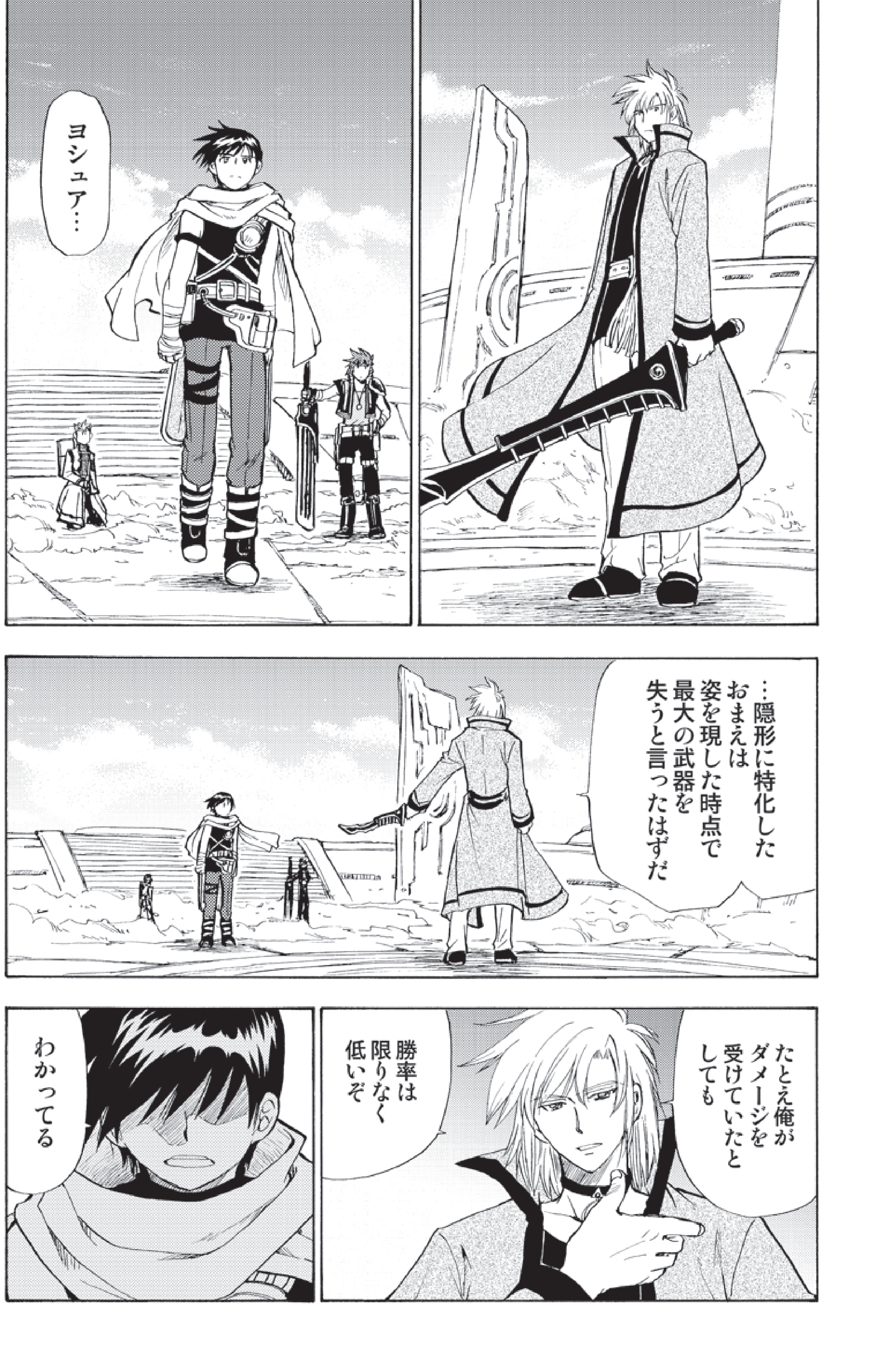

…しょせん
おまえたち
遊撃士は
人を守るだけの
存在…
空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
そんなものは
たとえ 俺を
出し抜けたとしても
この先で《白面》に
なぶり殺されるのが
関の山だ
おとなしく
ここで
果てるか
尻尾を巻いて
逃げるか
どちらかを
選ぶがいい


へっ
どっちもお断りだぜ!
すまんみんな!
今度は上手くやる!
アガットさん
陽動は彼には通じません
彼が求めているのは
おそらくそういうことじゃないから…
…すみませんアガットさん
ここからは僕にやらせてもらえませんか?
ヨシュア
《輝く環》の異変を止めて混乱と戦火を防ぐには
この先へ進まなければいけないことはわかっています
でも
そうするには

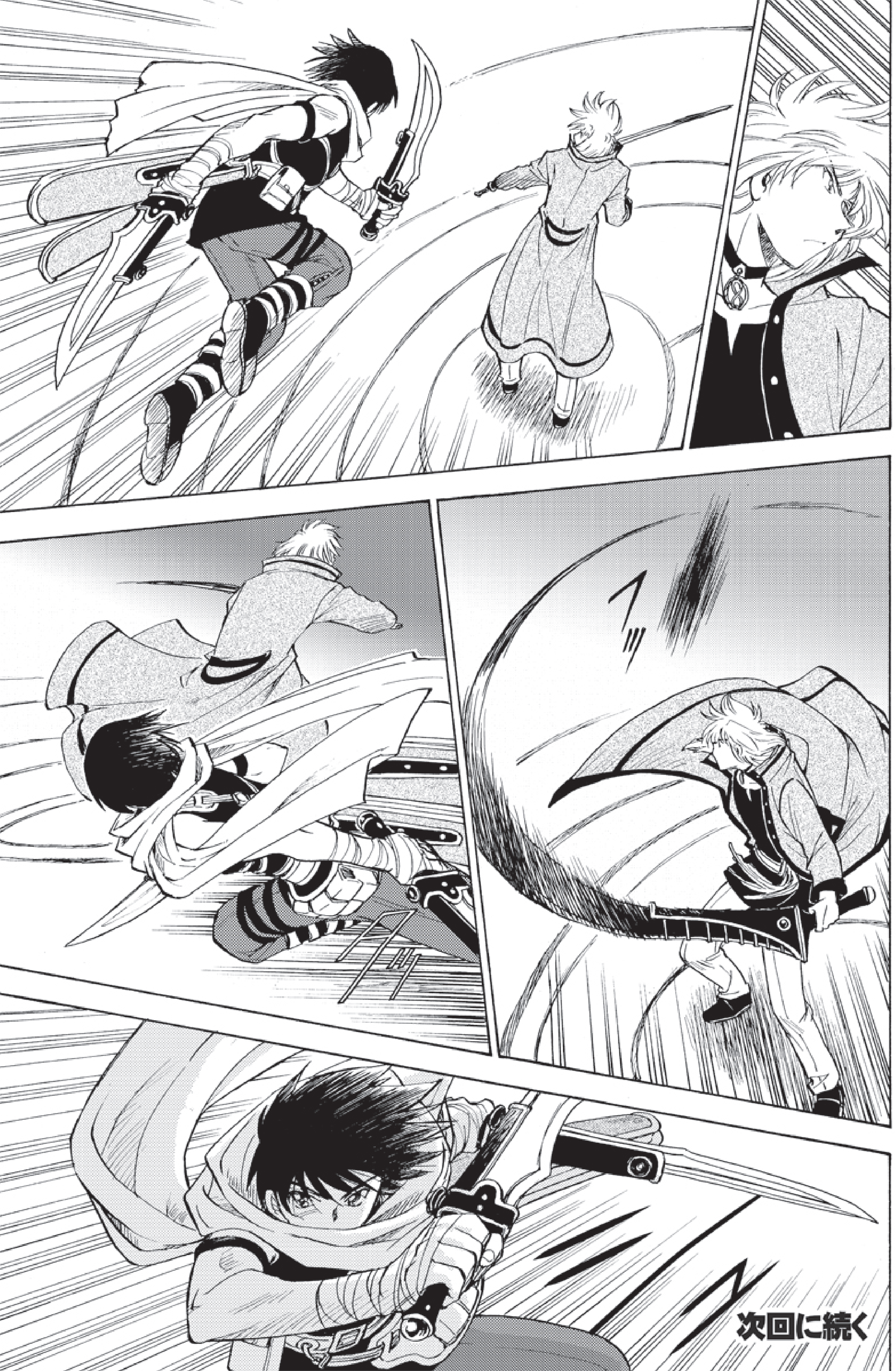
レーヴェを避けては通れない
…僕は
ずっと逃げ続けてきたんです
あの時自分を壊したのも
教授の言いなりになり続けたのも
彼女の前から姿を消したのも
自分自身の弱さに向き合うことを恐れていただけだったんだって
そのことに気づかせてくれた人たちに報いるためにも
僕は正面からレーヴェに向き合わないといけないんだ


そして
きっと
レーヴェも…
それを
レーヴェ自身に
気づいて
もらうためにも
——僕に
やらせて
欲しい


奴には俺が
落とし前をつけて
やるつもり
だったんだが…
仕方ねぇ
おまえになら
譲ってやっても
いいぜ
その代わり
絶対に
負けるんじゃ
ねぇぞ!
はい
必ず


ヨシュア…
…隠形に特化したおまえは姿を現した時点で最大の武器を失うと言ったはずだ
たとえ俺がダメージを受けていたとしても
勝率は限りなく低いぞ
わかってる


それでも
僕は
僕のすべてをかけて
《剣帝》に挑ませてもらう！
来い
《漆黒の牙》！


ヒュッ

次回に続く






リベール王国に姿を現した、
結社《身喰らう蛇》の牙・執行者たち。
その動きと示し合わせたかのような
エレボニア帝国の不穏な行動に王国は揺れる。
そして物語は、古代ゼムリア文明の精華・
リベル＝アークへと飛翔する！

リベール王国次期女王たるわたくしの名に賭けて！

# 英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～⑥

啄木鳥しんき

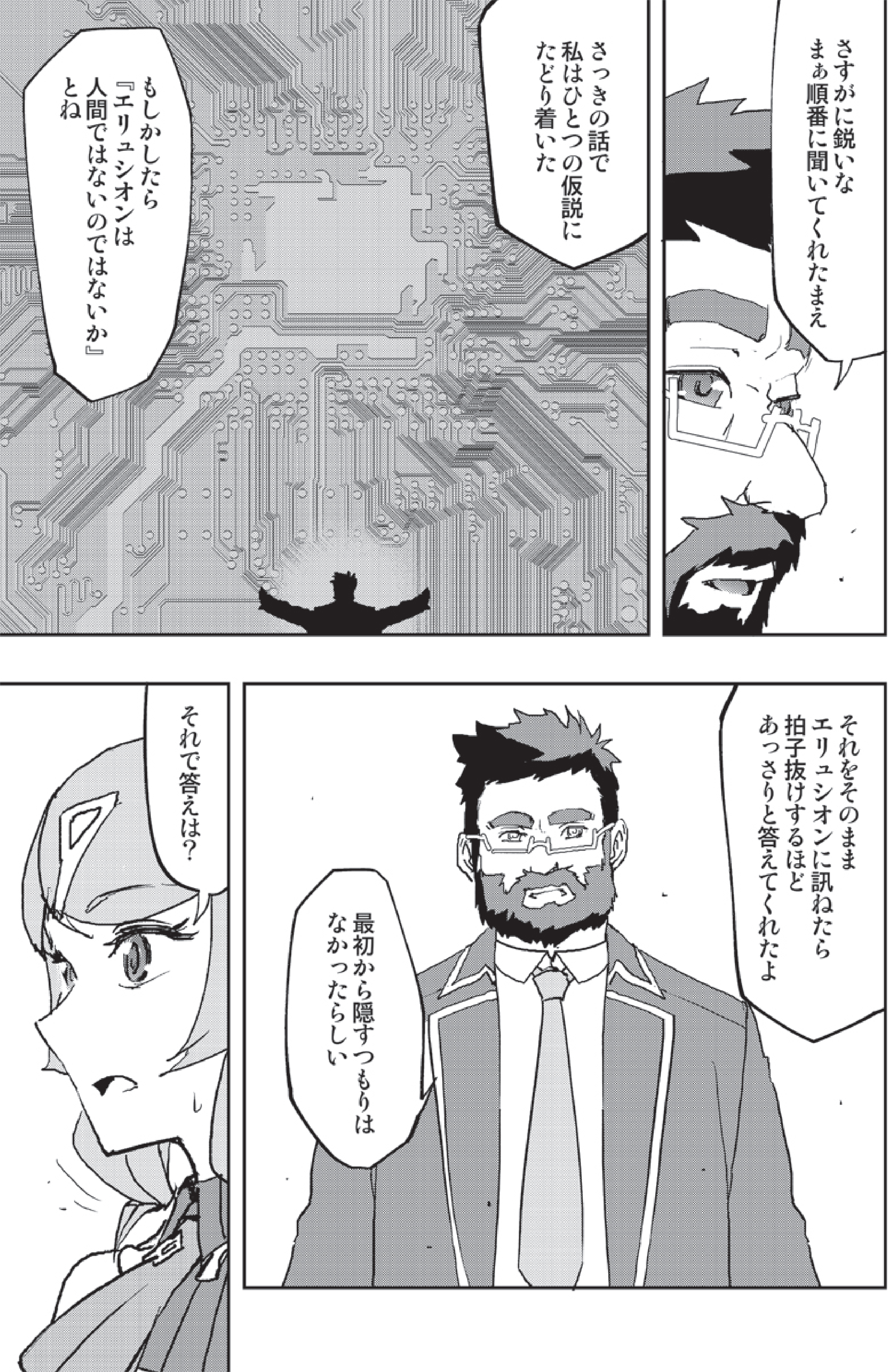
定価：1000円（本体909円+税）　ISBN 978-4-8021-3294-7
発行：フィールドワイ　発売：メディアパル


〝エリュシオン〟
その存在はそう名乗った
大戦の直前から通信が遮断され続けていたにも関わらずね
拘置所のオペレーターが気づいた様子もなかった
レンと同じ導力ネットの操作に長けたハッカーか何かかしら?
私も最初はそう疑っていたよ
何が目的かと聞いてみたら『あなたと会話がしたい』──
それだけを伝えてきた

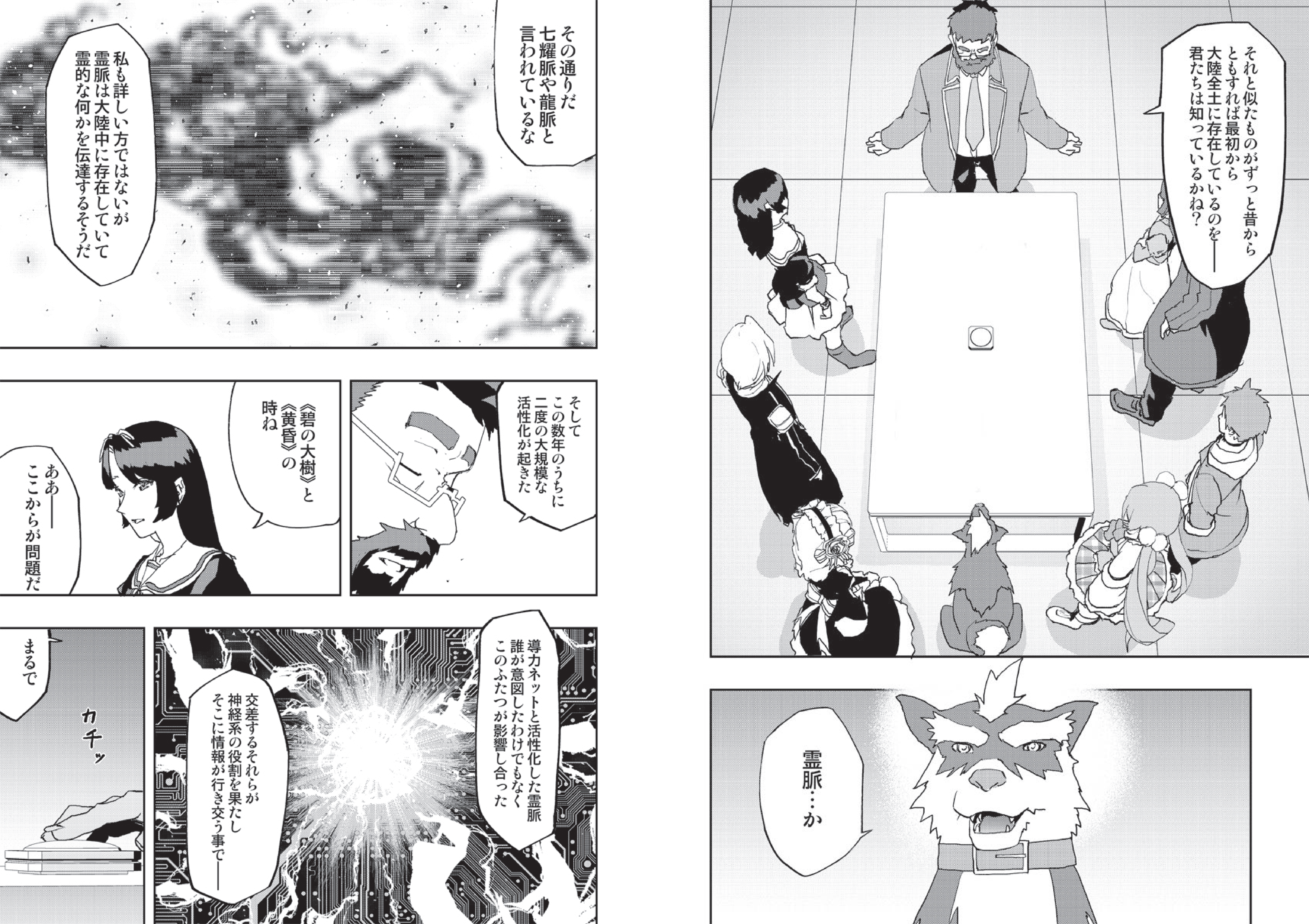

THE LEGEND OF HEROES
創の軌跡
【はじまりのきせき】
THE MISERABLE SINNERS
漫画　墨天業
原作　日本ファルコム


変わった方ですわね
私も興味が湧いてね それを承諾したよ
それから毎日人知れず エリュシオンと会話を繰り返した
なんの話をしたの？
あらゆる学問 あらゆる思想 あらゆる技術や歴史まで 考えうる限りの事を話題にした
そして驚いたよ 方向性の偏りがあるとはいえ 私など比べ物にならないほど エリュシオンはそのすべての領域において 大量な知識を持っている
そんな…
イアン先生よりもですか？
はは それこそ比べられたら 私は無知もいいところだろう
知識の量だけではない 外界に関しての最新の情報も 当然のように持っていた 議会の議題から路地裏の屋台の新メニューまで 恐ろしいほど詳しく把握していたくらいでね
しかも私が 確認できる限りにおいては そのどれもが正確だった
……
それほどの 知識量を有している エリュシオンだが——
それらの情報に 〝方向性〟はあっても 〝指向性〟がないのだ
人が何かの知識や情報を 得ようとする時には 常に目的を持っているものだ
端末
服
食べ物
権威
友達
成
お金
知識
情報
目的
それを知る事で何かの役に立てる 何かの達成感を得る もしくは単純に 周囲環境の認知などといったものだ
かといって 知る事自体が目的 といった類でもない


あくまで自動的であるいは最初から
そうであったように情報が自然と
エリュシオンに集まり続けている
そんな風に感じられたんだ
自動的に…
そんなことって…
ああ あまり適切な喩えでは
ないかもしれないが――
私にはあの時のエリュシオンが
ミラの使い方もろくに知らずに
億単位の大金を渡された
子供のように見えた
…危うさを感じますね
……
『あの時の』というのは？


さすがに鋭いな
まぁ順番に聞いてくれたまえ
さっきの話で
私はひとつの仮説に
たどり着いた
もしかしたら
『エリュシオンは
人間ではないのではないか』
とね
それをそのまま
エリュシオンに訊ねたら
拍子抜けするほど
あっさりと答えてくれたよ
最初から隠すつもりは
なかったらしい
それで答えは？


――〝機械知性〞だ
それって人形兵器のような…？
話を聞いた限りではそういうのとは次元が違うみたい
それこそ…
エリュシオンの誕生はかなり特殊でね誰かが意図的に作ったわけではなく〝自己創発〞したもののようだ
自己創発…？よくわかりませんけど
〝個〞の要素が〝全体〞として一定の組織化と循環性を獲得する現象とでもいうべきかしら
君たちも知っての通りこのクロスベルには導力ネットが張り巡らされている
そしてこのネットワークは帝国やリベールにも普及しつつある
網目のように繋がり情報を伝達する
この導力ネットは間違いなく新時代の技術の産物だが…


それと似たものがずっと昔から
ともすれば最初から
大陸全土に存在しているのを――
君たちは知っているかね?
霊脈…か
その通りだ
七耀脈や龍脈と
言われているな
私も詳しい方ではないが
霊脈は大陸中に存在していて
霊的な何かを伝達するそうだ
そして
この数年のうちに
二度の大規模な
活性化が起きた
《碧の大樹》と
《黄昏》の
時ね
ああ――
ここからが問題だ
導力ネットと活性化した霊脈
誰が意図したわけでもなく
このふたつが影響し合った
交差するそれらが
神経系の役割を果たし
そこに情報が行き交う事で――
カチッ
まるで


人間の脳を大陸規模で
シミュレートするような
形になった
ヴォン
そこから独自の〝思考〟が生まれた
それが――〝エリュシオン〟だ
人間の脳を…
大陸規模で…？
ありえるのか
そんなこと？
少なくとも
再現する事は
できないだろう
……


我々人類は未だ完全に
脳の仕組みを解明できていない
どういう構造でどのようにして
意識が生まれるのかすら
理解できていないんだ
だからこれは
あくまで偶然の産物
〝奇跡〟のような
ものだろう
導力ネットと霊脈から生まれた
エリュシオン――
どうりでそこまでの
大量の情報を持っていたのね
ああ――だが本当にそれだけなら
高度な自己判断能力を持つだけの
巨大データベースに
とどまっていただろう
危うさはあっても
やり方次第では
まだ人がコントロール
可能な範疇だった…
それ以上に…
何があるというんですの？


計算能力だ
複数の端末を利用した並列計算と言ったら理解できるかな?
財団やZCFでも開発段階の最新技術一般には知られていない
どんな高性能な端末でも計算能力には限界があるわ
しかし複数の端末を連結して同じ問題を処理させた場合——
その限界は容易に突破できる
ただこの世界じゃまだ数台程度の並列処理が限界だけどね


エリュシオンは導力ネットに接続されているすべての端末からリソースを借りて行っているという訳だ
…なるほど
そういうことだったのね
とにかく知性を持ったエリュシオンはその計算能力を利用してさらに自己進化を繰り返した
え…
さらになにかあるんですの!?
ああ むしろここからが…
重要だ
Fortsetzung folgt



FB ファルコムBOOKS
これを読むまで
しぬでないぞ!!
『月刊 Falcom magazine』に掲載された読み切りコミック 13 本を完全収録したコミックアンソロジーがついに登場！ 新旧ファンも納得のラインナップで贈る、ファルコム愛溢れる1冊を是非ご堪能あれ！
カバーは『英雄伝説空の軌跡』コミカライズを担当した啄木鳥しんき先生の豪華描き下ろし♪
好評発売中!!
ふぁるこむコミックざんまい
収録テーマ作品
『イース』
『ブランディッシュ』
『ヴァンテージマスター』
『ぐるみん』
『ザナドゥネクスト』
『軌跡シリーズ』
価格：本体920円+税
ISBN 978-4-89610-818-7
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら www.field-y.co.jp




英雄伝説 創の軌跡
THE MISERABLE SINNERS 01
漫画：墨天業
《仮面の隠者》《暗殺者》《自律人形》
それぞれの思惑を胸に
運命と真実に迫る物語
定価：1000円（本体909円+税）
ISBN978-4-8021-3309-8
発行：フィールドワイ 発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©BOKUTENGOU ©Field-Y
◉フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
◉ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks

# はぐっと！ぬいぐるみタッセル「リィン」「クロウ」登場！その他新グッズも予約受付開始

カーテン魂より『ぬいぐるみタッセル』2種、『カードスリーブ』全10種、『デスクマット』全6種が新登場。ぬいぐるみタッセルとカードスリーブは期間限定受注商品ですので、どうぞお見逃しなく！

## 「はぐっと！ぬいぐるみタッセル（全2種）」

カーテンを束ねるタッセルをかわいいぬいぐるみにした「はぐっと！」シリーズに「創の軌跡」より「リィン」と「クロウ」が登場。タッセルとして使用したり、ペットボトルやスマホを抱えさせてデスクの上に飾ったり、バッグにはぐっと付けて一緒におでかけするなど使い方はいろいろ！



リィン、クロウの単品商品と、お買い得なセットも！

■**受注期間**：2月18日（金）12:00～3月14日（月）23:59
■**ぬいぐるみタッセル 特設ページ**
https://www.curtain-damashii.com/hug_hajimari/

## 「イース」「軌跡」カードスリーブ（全10種）

カードを保護するために利用する袋状の光沢のあるカードスリーブ。
裏面はイラストが印刷されており、表面は透明となっています。



フルカラー＋白＋銀
スタンダードサイズ［横］67mm ×［縦］92mm　1セット 65枚入り

■**受注期間**：2月18日（金）12:00～3月14日（月）23:59

## 「イース」「軌跡」デスクマット（全6種）

カードゲームなどに利用できるラバーマット（プレイマット）に新デザイン登場。表面がポリエステル、裏面がラバー素材（黒色）になっています。デスクマットやマウスパッドとしても利用できます。



■**カーテン魂 商品ページ**：https://www.curtain-damashii.com/item/tag/falcom/

サイズ：［横］約60cm×［縦］約35cm［厚さ］2mm

# ファルコム40周年イラストver.IIを使用した「ファルコムアニバーサリーフラッグ」&「ファルコムアニバーサリートート」登場!!

## ファルコムアニバーサリーフラッグ

約1020×740mmのビッグサイズに40年間の歴代キャラたちが賑やかに大集合。4カ所にハトメが付いていますのでフックにかけて飾ることができます。お好きな紐を付けて棒にくくり付ければフラッグとしても使用可能。色々な用途にアレンジしてお使いいただけます。



■**発売日**：2022年3月9日（水）
■**価格**：4,800円（税抜）

■**ファルコムショップURL**：
https://falcom.shop/

## ファルコムアニバーサリートート（ナチュラル／ブラック／レッド 全3種）

10オンスの厚手コットン100%キャンバス生地に長めの持ち手が付いているので荷物が増えても安心。ファルコム歴代キャラたちを引き連れてお出かけしよう！



■**発売日**：2022年3月9日（水）
■**価格**：各2,600円（税抜）




# ▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

# 全85曲210分越え大ボリュームアルバム『英雄伝説 黎の軌跡 オリジナルサウンドトラック』発売決定！

『英雄伝説 黎の軌跡（クロノキセキ）』の劇中曲を収録した3枚組音楽アルバム『英雄伝説 黎の軌跡 オリジナルサウンドトラック』が、2022年3月9日（水）に発売決定！
メインタイトル画面で使用された象徴的な楽曲『黎（あおぐろ）き狭間の中で』をはじめ、『昔歳（せきさい）の情景』『Mechanical Syndrome』『光芒のレゾナンス』などゲーム内で使用された楽曲を収録。さらに、ボーナストラックとして主題歌『名もなき悪夢の果て』Less Vocalバージョンを収録した全85曲、210分超の3枚組オリジナルサウンドトラックです。
なお、CD盤は初回生産分のみ『英雄伝説 黎の軌跡』の世界観をイメージしたホログラムスリーブ仕様となります。
また、各音楽配信サイトでのダウンロード販売のほか、「mora」「music.jp」などハイレゾ配信サイトでのハイレゾ音源版販売、「Spotify」「Amazon music」「YouTube Music」など定額制音楽配信サービスでの楽曲配信も同日より開始します。






初回生産分スリーブ
※CD盤は初回生産分のみ、ホログラムスリーブ仕様となります。

■**発売日**：2022年3月9日（水）
■**収録曲数**：全85曲（CD3枚組）
■**価格**：【CD盤】3,400円（税抜）
【ダウンロード版】［アルバム］2,917円（税抜）／［単曲］139円（税抜）
【ハイレゾ音源版】［アルバム］3,148円（税抜）／［単曲］231円（税抜）

■**音楽配信サイト**
《iTunes® Store》http://itunes.apple.com/jp/artist/id120174391
《Amazon デジタルミュージック》http://j.mp/VSjC6N
《mora》http://mora.jp/artist/299183/all
《music.jp》http://music-book.jp/music/Artist/141849/Album

■**ハイレゾ版音源配信サイト**
《moraハイレゾ配信ページ》http://mora.jp/artist/299183/h#discArea
《music.jpハイレゾ配信ページ》http://music-book.jp/music/Artist/141849/hiresoalbum
《e-onkyo music》http://www.e-onkyo.com/search/search.aspx?label=Falcom
《OTOTOY》https://ototoy.jp/_/default/a/124419

■**定額制音楽配信サービス**
《Spotify》https://www.spotify.com/jp/
《Amazon music》https://music.amazon.co.jp/artists/B00B4R35JQ/falcom-sound-team-jdk
《Apple Music》https://www.apple.com/jp/music/
《YouTube Music》https://music.youtube.com/channel/UCOOOdHr4emlkr02wjynGF3Q

■**関連サイト**
《「英雄伝説 黎の軌跡」公式サイト》https://www.falcom.co.jp/kuro/
《「ファルコム音楽CD」情報ページ》https://www.falcom.co.jp/music
《ファルコム音楽フリー宣言》https://www.falcom.co.jp/music-use

# コトブキヤ×日本ファルコムが送る『軌跡シリーズ』フィギュア化計画第3弾&4弾が決定！

「リーシャ・マオ」と「クロウ・アームブラスト」がフィギュア化です。続報をお楽しみに！




■**コトブキヤふぃぎゅあブログ**
https://www.kotobukiya.co.jp/figure-blog/figure-blog-272721/

2月の
新／衣装替えキャラクターをチェック！

THE LEGEND OF HEROES
# 暁の軌跡
アカツキノキセキ



毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
２月はおなじみの「ナハトの奮闘記」が開催！　さらにミリアムの衣装替えキャラクターが登場！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/
公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

## 陰陽師・ミリアム

狐面が特徴的なミリアムの陰陽師衣装。真紅から紺碧へと変わっていくグラデーションがなんとも神秘的な印象を醸し出している。ひな祭りの季節にもピッタリな和装姿だ。

## 期間限定イベント「ナハトの奮闘記 Vol.16 グラッツ編」実装！

リベール王国の商業都市ボースを訪れた試験班一行。
ナハトは先輩遊撃士のグラッツとともに観光を楽しんでいた。
昼食を終え、支部に帰ってくるとグラッツから模擬戦を申し込まれ、
ナハトは思わぬ“苦悩”を味わうことに……。




※現在は開催終了しています

※画像は開発中のものです。　※ 上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

### ⚜第3話『三人目を探せ！』

### ⚜登場キャラクター

アリサ・ラインフォルト（まじかる☆アリサ）
ラウラ・S・アルゼイド（まじかる☆ラウラ）
モナくん

○

エマ・ミルスティン
マキアス・レーグニッツ
エリオット・クレイグ
ガイウス・ウォーゼル
エリゼ・シュバルツァー
クロウ・アームブラスト
トワ・ハーシェル
ヴィヴィ
リンデ
ベッキー

○

リィン・シュバルツァー（魔界皇子リィン）
ユーシス・アルバレア（魔界貴族ユーシス）
怪物

○

その他

□ アリサの屋敷・全景（朝）

風に揺れる庭の木々の中に、白亜の豪邸が建っている。

モナの声「というわけで……！」

□ 同・アリサの部屋

私服姿のアリサとラウラの前で、熱弁するモナくん。

モナ「第一回！『三人目の魔法少女を探せ』会議モナ～～っ！」

なぜかホワイトボードまで用意されていて、『三人目』『魔法少女』などとペンで書かれている。

アリサ「（アクビしつつ）ふあぁ。折角のお休みだってのに……ゆっくりしちゃだめなの」

モナ「何言ってるモナ！　事態は一刻を争うモナ！」

そんなモナくんに、ラウラが近寄り、

ラウラ「うん。動く姿も可愛いな……。また、モフモフしたくなってくるぞ……」

うっとりとした目で、モナくんに手を伸ばす。

モナ「そ、そのヨダレは何モナっ⁉」

慌てて後ずさるモナくん。

ラウラ「おっと、これは失礼した」

ヨダレを拭い、キリッとした顔に戻るラウラ。

モナくん、ホッと気を取り直して、

モナ「いいモナ！　あの魔界皇子には、手下がいるに違いないモナ！」

アリサ「手下って⁉」

ラウラ「援軍が来るということか？」

モナ「そうモナ！」

× × ×

イメージで——

魔王城の下に勢揃いする、おどろおどろしい魔王の軍団のシルエット。

ミリアムっぽい子もいたりする。

モナの声「魔界には魔王配下の魔王軍がいるモナ！　きっと今頃、怖い手下が遣わされているに違いないモナ！」

× × ×

アリサ「そういうものなの……」

モナ「とにかく、二人のままでは不利モナ！」

ＡＲＣＵＳを取り出して、

モナ「残り一つのＡＲＣＵＳの適合者を、すぐに見つけないといけないモナ！」

ラウラ「承知した。して、どうすればいい？」

モナ「手がかりがない以上、人が多い場所に行くしかないモナ！」

アリサ「人が多い場所と言えば……。あそこしかないわ！」

何かを思いつくアリサ。



□ オープニング

□ 山手線っぽい線路のガード下

ガタンガタンと轟音を立てて電車が走り過ぎていく。

そんな中——ガード下の暗闇から、

「ヒヒィイイイン！」

と、馬のいななきが聞こえてくる。

なんと、暗闇の中から足音を響かせながら、見事な白馬が駆け出してきたのだ。

その白馬の手綱を握っていたのは——。

ユーシス「ここが人間界か……」

緑のマントを風にたなびかせ、魔界貴族の衣装を着たユーシスであった。

人々が行き交う通りを見やるユーシス。

小さい子供が指さして、

子供「わー！　おうまさーん！」

母親「シッ！」

慌てて子供の手を引き、見ないふりをして去って行く母親。

ユーシス「フン。騒々しいところだな……」

気にも止めずに手綱を引くと、

ユーシス「行くぞ、シュトラール。我らが皇子のもとへ！」

いななきと共に駆けていくシュトラール。

□ サブタイトル

□ 原宿の竹下通りっぽい繁華街

アリサ「これよこれ！　レイトン商店の新作、チョコバナナクレープ！　一度食べてみたかったの！」

サクッとクレープを食べるアリサ。

ラウラ「ほう。バナナの上にクリームとチョコがふんだんにのせられ、飾りにチョコビーンズをちりばめた逸品……。それでいて、くどくなく、適度な甘み……」

などと言いつつ、クレープを食べながら、若者で溢れた繁華街を歩いて行くアリサとラウラ。

（ラウラは竹刀も携帯している）

モナくん、アリサの鞄に入ったまま不満そうに、

モナ「三人目の魔法少女さがしは、どうなったモナ……」

ラウラ「そなたの分もあるぞ。どうだ？」

と、ラウラがクレープを差し出す。

モナ「モナはモナ国王モナ！　そんな軽薄なお菓

子なんて、いらないモナ！」
ぷいっとそっぽを向く。
アリサ　「またモナモナうるさい……」
ラウラ　「む、そうか！　そういうことなら！」
ダッと駆けていくラウラ。
モナ　「モナ？」
ラウラ、マッハで買い物して戻り、差し出したのは、
ラウラ　「これならどうだ！　モナカだっ！」
モナ　「モナカ……モナ⁉」
モナカに衝撃を受けるモナくん。
モナ　「モ、モナの名前を取ったお菓子があるとは……人間界、侮れないモナ！」
と言いつつ、モナカをサクッと齧ると、
モナ　「外はサクサク！　中は甘々！　最高モナ〜〜っ！」
うっとりした顔になる。
ラウラ　「ふふ。よかったな」
アリサ　「ええ。素敵な休日よね」
と和んでいると、
モナ　「って、そうじゃないモナーっ！」
真顔に戻ったモナくん、もしゃもしゃとモナカを食べながら、
モナ　「早くＡＲＣＵＳの適合者を探すモナ！」
アリサ　「ちょっと！　声が大きい！　分かってるから！」
アリサ、慌ててモナくんを鞄に押し込み、
アリサ　「……適合者って、誰でもいいってわけじゃないの？」
ラウラ　「そうだな。私も、何の問題もなく変身出来た気がするのだが……」
そう言い、首を傾げる二人に、モナくんが鞄から顔を出して、
モナ　「そんなことはないモナ！　二人とも強い思いを持っていたから、変身が出来たモナ！」
アリサ　「強い思い……？」

×　×　×

回想――＃１で。マクモナルドや仲間を守りたいと願ったアリサ。
＃２で。モナくんをモフモフしたいと強く願ったラウラ。

×　×　×

ラウラ　「言われてみれば……」
アリサ　「確かにそうだったわね」
モナ　「強い思いを持つ人に、ＡＲＣＵＳは反応するモナ！」
アリサとラウラ、辺りをキョロキョロ見渡して、
ラウラ　「だが、強い思いを持つ人など、どうすれば分かるのだ？」



アリサ　「甘い匂いがしたりして、ちゃっちゃと見つからないの？」
モナ　「そんな、どっかの魔法つかいアニメみたいに簡単にいくわけないモナ！　現実は厳しいモナ！」
と、突如、ビクッと何かの気配を感じるモナくん。
モナ　「モナ⁉　この感じ……強い気配モナ⁉」
アリサ　「えっ⁉」
ラウラ　「む？　魔界皇子か？」
慌てて振り返るアリサとラウラ。
だが――
「きゃああ！」
「すてきー！」
などと、黄色い歓声と共に目つきの鋭い金髪の青年が歩いてきた。
アリサ　「な、なにあれ……！」
それは先程の衣装のユーシスで、目をハートにした少女達が取り巻いていた。
その中には、アリサ達のクラスメート、ヴィヴィとリンデもいて、
ヴィヴィ　「あの〜、それって何かのコスプレですか？　あっ、もしかしてオーディション出るとか？」
リンデ　「ちょ、ちょっと、ヴィヴィ」
腰にはサーベル。長い緑のマントを羽織った古風なユーシスの出で立ちに、ドン引きするアリサたち。
アリサ　「ヴィヴィとリンデまで……」
ラウラ　「なんとも凄い衣装だな……」
だが、ユーシスは女子達に全く感心なく、
ユーシス　「お前達になど用はない。どいてもらおうか」
そう言い、ヒュウッと口笛を吹く。
途端に、ヒヒーンといななきと共に、駆けてくるシュトラール。
アリサ　「って！」
ラウラ　「馬ーーーっ⁉」
モナ　「モナっ⁉」
ビックリ仰天する一同。
一斉に引いていくヴィヴィら女子達。
ユーシス、シュトラールに乗馬すると、ゆっくりラウラ達の方に歩み寄ってくる。
ユーシス　「おい、貴様達」
と、アリサとラウラを見下ろし、
アリサ　「な、何……？」
ユーシス　「道を開けろ」
ラウラ　「む……」
竹刀に手をやるラウラだったが、

アリサ　「ちょ、ちょっと、ラウラ！」
　慌ててラウラを引っぱり、道を譲る。

ユーシス　「……」
　ラウラたちを一瞥すると、乗馬したまま過ぎ去っていくユーシス。

ラウラ　「まったく、何なんだ、あの不遜な男は……。コスプレイヤーとやらか？」

アリサ　「完全に不審者よ。関わり合いにならない方がよさそう……」
　汗ジトで見送るアリサたち。

モナ　「と、とにかく……！　強い思いを持つ人を探すモナ！」

□点描で――街中を歩き回るアリサとラウラ

　ベッキーの青果店前で、

ベッキー　「おキャベツ様が、今ならたった四分の一カットで250ミラや！　どうや、買った買った！」
　と、勧めてくるベッキーに、汗ジトのアリサ。

アリサ　「いや、私達、一人暮らしじゃないし」

ラウラ　「た、高いな……」

モナ　「強い商売への執念を感じるモナ……！」
　と、翳してみるがARCUSは輝かない。

×　×　×

　橋から釣り糸を川に垂らしている青年――ガイウスが、

ガイウス　「思いか……。そうだな。おまえたちの思いに共鳴する風。それが行く道を示してくれるだろう」

アリサ　「ガイウス、アドバイスは有難いんだけど……」

ラウラ　「まるで意味が分からんな」

モナ　「強い風への思いを感じるモナ……！」
　と、翳してみるがARCUSは輝かない。

×　×　×

ラウラ　「そもそも、男子だから……」
　そして、連れだって歩くエリオットとマキアスに遭遇するアリサ達。

モナ　「モナ！　あの子には、前に強い怒りのオーラを……！」

アリサ　「だから、エリオットは男子だって男子！　みさかいないわねっ！」

モナ　「モナっ！」
　鞄に押し込まれるモナくん。

エリオット　「アリサ、ラウラ。どうしたの？」

ラウラ　「い、いや、何でもない」
　アリサ、モナくんを隠しつつ、

アリサ　「あ、そうだわ。二人は、強い思いを持つ人が集まるような場所とか……知らないかし





ら?」

エリオット　「強い思い……?」

キランとメガネを輝かせるマキアス。

マキアス　「ほほう。そういうことなら、この僕に任せて貰おうかっ!」

□　オープンスペースに作られたコンサートステージ

マキアス　「強い思いが集まる場所……! それなら、アイドル志望者と、彼らを推すファンの熱狂が集うこのオーディション会場以上の場所はないっ!」

バババン! と、妙にシリアス顔で言うマキアス。

アリサ　「へ、へえ……」

ラウラ　「確かにここならよさそうだが……」

軽く引きながら、入口のゲート前に立っているアリサとラウラ。

アリサ　「どうしてこんな場所知ってるのよ?」

エリオット　「マキアスは実は、地下アイドルファン……」

マキアス、慌ててエリオットの口を塞いで、

エリオット　「むごっ」

マキアス　「た、たまたまチケットが当たってな! 僕とエリオット二人で見に来たんだ! はははっ!」

そう言い、ハチマキをギュッと締めて、

マキアス　「今日は男女混合のオーディションらしいぞ。なかなか楽しみだな! 初めてだな、こんな所は! ハハハハッ!」

と、かなり乗り気でチケットを見せると、エリオットと共に入っていくマキアス。

アリサ　「結局、貴方が見たいだけじゃないのよ!」

呆れているアリサ。

ラウラ　「どうするのだ?」

アリサ　「そうねえ……」

と、二人が考え込んだ時――。

スカウトの声　「あ、キミっ!」

アリサとラウラ　「!」

なんと、会場前の通りで、スカウトに呼び止められているエマを見つけた。

エマ　「あの、何でしょうか?」

スカウト　「いいねー。キミ、飛び入りでいいからオーディションに出ない?」

アリサ、その様子を見て、

アリサ　「エマ……」

と、声をかけようとするが――。

エマ　「オーディション……ですか……?」

と、思い詰めた様子で考え込んでい



て、

アリサ　「……?」

思わず立ち止まり、オーディションの看板の陰に隠れるアリサ。

スカウト　「人数が集まらなくてさ! 何人か素人さんにも声をかけてるんだよ! お願いだからっ!」

エマ　「そ、そういうことでしたら……」

エマはスカウトの誘いに頷くと、関係者入口に入っていく。

アリサ　「行っちゃった……」

ラウラ　「おーでぃしょん? とやらを、まさかエマが受けるのだろうか?」

アリサ　「いつも物静かだし、そんなのに出るような子じゃないと思ってたけど……」

ラウラ　「何やら事情がありそうだな」

モナ　「強い思いを感じるモナ……」

と、モナくんがARCUSを取り出す。

モナ　「この中に行けば、きっと強い思いを持つ人に出会えるモナ。三人目はここにいるかもしれないモナ!」

ARCUSも僅かに反応して光っている。

ラウラ　「だが、どうやって入る?」

アリサ　「私達もオーディションに出るとか?」

途端に、ラウラが赤面して、

ラウラ　「な! いやいや、人前に出るなど恥ずかしくてできぬ! 絶対あり得ぬ!」

アリサ　「でも、エマのことも気になるし……」

と、二人が話していると――。

トワの声　「あ! アリサちゃん!」

現れたのは、マクモナルド衣装のトワ。

アリサ　「トワ会長⁉」

ラウラ　「ここに来たと言うことは、まさか、オーディションに?」

驚くアリサとラウラだったが、

トワ　「え⁉ ま、まさか〜。今日はね、この会場に出店を出すことになったんだよ!」

背後には、屋台用の飾り付けや、材料を積んだ台車が止まっている。

アリサ　「一人で運んできたんですか?」

トワ　「うん。ちょっと大変だったよ〜。他のアルバイトが急に休んじゃって、私だけでさ」

アリサ　「……そっか、私は元々休日でしたけど……」

アリサ、何かを考えついて、

アリサ　「そういうことでしたら、私達にお手伝いさせて下さい!」

トワ　「え、いいけど。確か、あなたは水泳部の……」



ラウラ「ラウラ・S・アルゼイドです。い、いいのですか。……その可愛い衣装を……こんな私が……」

興奮するラウラ。

トワ「うん。手伝ってくれるなら、大歓迎だよっ！」

バイトの制服を差し出すトワ。

ラウラ「……おおっ！」

思わずガッツポーズするラウラ。

アリサ「そこまで喜ぶこと……？」

モナ「（ボソっと）モナ……」

□ 同・会場内の客席

アリサとラウラが、マクモナルドの制服姿になって、客席内でポテトやハンバーガーを届けている。

アリサ「ハッピーモナセット一つですね。どうぞー」

と、モナくん人形つきのバーガーセットを渡すアリサ。

ラウラ「ドリンクは大盛りでよかったのだな」

などと働きつつ、控え室への通路を見やるアリサとラウラ。

アリサ「（小声で）そろそろかしら」

ラウラ「（小声で）ああ。控え室に届けるふりをして行こう」

アリサ達、通路の方へ向かいながら、トレイに載ったモナくんに、

アリサ「（小声で）静かにね」

と話しかける。

だが、そのモナくんはピクリとも動かず――。

× × ×

出張マクモナルド屋台の前。

トワ「はーい！ いらっしゃいませーっ！ 今なら『走る！ ハッピーモナくん』が、セットでついてお得ですよ～！」

宣伝しているトワの横で、展示されているモナくん。

子供に引っぱられたり、潰されたりして、

モナ「（M）ア、アリサ……！ そっちはモナじゃないモナ！ 助けてモナー！」

涙目で心の叫びを上げる。

と、そこに――。

クロウ「よ！」

リィン「こんにちは、トワ会長」

現れたのはクロウとリィンだ、

トワ「あ！ リィンくんたち！」

エリゼ「私もいますわ」

ペコリと挨拶するエリゼ。

トワ「エリゼちゃんも！ 久しぶりだねっ」

クロウ「こんな所で一人で出店とは、トワもご苦労だなあ」

　ポンポンとトワの頭を叩くクロウ。

トワ　「違うよっ。アリサちゃんとラウラちゃんも、手伝ってくれてるんだから」

リィン　「へえ、アリサも……」

　と、エリゼはモナくんを見つけて、先程の子供以上に、グニュグニュと引っぱったり潰したり、いじり倒している。

エリゼ　「リィン兄様。この子、柔らかくていい感じですね……」

リィン　「だったらセットにするか？」

　と、クロウがすかさず間に入り、

クロウ　「おっと待った。今日はここのチケットも、全部俺のおごりだって言ったろ。セット三つ頼むぜ」

トワ　「ふ〜ん。随分景気がいいんだね？」

クロウ　「へヘッ。ちょっと臨時収入があってなあ」

トワ　「どうせまた、ブレードで勝ったんでしょ？　いけないんだからね」

　トワに突っ込まれたりしつつ。

クロウ　「へえへえ」

　と、セットを受け取るクロウ。

モナ　「（M）モナ〜〜！」

　エリゼに掴まれ、涙目のモナくん。

エリオット　「やあ、リィン！」

マキアス　「き、奇遇だな！」

　席から声をかけるマキアスとエリオット。

　いつもの面々が揃い、ついに、オーディション開演のジングルが鳴る。

□　同・控え室

　一人、控え室で何やら思い詰めた様子のエマ。

エマ　「……」

　だが、グッと決意の表情になる。

　×　×　×

　通路を歩いていくアリサとラウラ。

アリサ　「控え室はこっちかしら？」

ラウラ　「いや……間違えた。この先はステージだな」

　と、司会の声がステージから聞こえてきて、

司会の声　「では、参りましょう！　エントリーナンバー一番は……！」

□　同・ステージ

　『No.1』の札を胸に付けた男がババン！　とステージに立つ！

　客席からザワザワと声が上がる。

　×　×　×

　アリサとラウラ、不思議に思い、ステージ袖から覗いてみると——。

ラウラ　「なっ……！　あ、あの男はっ！」

アリサ　「ふ、ふ、不審者っ！」



　ドン引きするアリサたち。

　×　×　×

　なんとステージに立っていたのは、先程街で遭遇したユーシスであった。

ユーシス　「……」

　無言で客席を見やるユーシス。

リィン　「……っ！」

　その中にはリィンもいる。

　ユーシスの姿に引いている観客達の中で、

クロウ　「へえ、面白そうじゃねえか……」

　と、意味深に呟くクロウで——。

〈中CM〉

## □ オープンスペースのコンサートステージ

――の舞台袖から、アリサとラウラがステージを覗いている。

× × ×

その視線の先には、マントを羽織ったユーシスが登壇している。

アリサ　「なんなのよ、あの男……！」
ラウラ　「あの奇抜な衣装。やはり、おーでぃしょんに出るためであったのか？」

× × ×

ユーシス　「……」

無言で会場を見渡すユーシス。

ユーシス　「（M）多くの人間が集まると聞き、来てはみたが……」

会場内にはマキアスやエリオットなど、大勢の姿が見える。

ユーシス　「（M）皇子は見当たらぬか」

× × ×

客席で俯いているリィン。
そのためユーシスの視界には入らず。

リィン　「……っ！」

ゾクッと体が震えて、右手を押さえる。

エリゼ　「兄様？　どうかなさいましたの？」
リィン　「い、いや……何でも……。ちょっとトイレに行ってくるよ……」

席を立つリィン。
その隣にいるクロウ、ステージのユーシスを見て、

クロウ　「なんだ、あいつ？　さっきからボーッとつっ立ってるぜ……」

× × ×

司会　「で、では、まず一曲！　披露して頂きましょう！」

司会を睨むユーシス。

ユーシス　「一曲？　唄えというのか？」
司会　「え、ええ。出場して頂いた以上、最低でも何かパフォーマンスを……」
ユーシス　「パフォーマンスか……。フン。ならば、いいだろう！」

バッと緑のマントを脱ぎ捨てるユーシス。

× × ×

エリゼ　「まあ！」
クロウ　「！」

驚きの顔になる観客達一同。

モナ　「（小声）モナっ……！」

モナくんもエリゼの膝の上で驚く。

× × ×

なんと、ユーシスは、首にチョー



カー、黒いシャツ、開いた襟元、黒い手袋、白いパンツという厨二なバンドマン姿になって、ポーズを決めていたのだ！

ユーシス　「（M）少しは、この世界に馴染んでおくのもありだろう」

グッとマイクを構えると、

ユーシス　「いかせてもらうぞ！」

途端に流れ出したのは、ポップな曲調のイントロ。

× × ×

客席のマキアスが、

マキアス　「こ、これはっ！　SPiKAの新曲、『恋のシューティングスター！』」
エリオット　「女性アイドルの曲だっけ？」

× × ×

司会　「失礼、曲の変更を……！」
ユーシス　「フ……構わんっ！　この通りに歌えばいいのだろう！」

歌詞カードを司会から奪い、ノリノリで歌い始めるユーシス。

× × ×

アリサ　「す、凄い……！　フリも完璧だし、音程もあってるわ！」
ラウラ　「ポップなアイドル曲を、難なく歌ってみせるとは……！」
アリサ　「ただの不審者と思ったけど、やるわね……」

と、アリサ、ハッと気付いて、

アリサ　「って、感心してる場合じゃないし！」
ラウラ　「今のうちに、エマの所へ……！」

## □ 同・楽屋

鏡台の前でエマが考え込んでいる。

エマ　「……」

と、その背後に「ニャオン」という鳴き声と共に、黒猫がやってくる。

エマ　「セリーヌ？」

そう呼ばれた黒猫のセリーヌ、エマの膝の上に乗ってゴロゴロと喉を鳴らす。

エマ　「心配して来てくれたの？」

フフッと微笑むと、

エマ　「私なら、大丈夫よ。姉さんの待つ世界に、少しでも、近づくために……」

そう言い、決意の顔になり、

エマ　「そのために、挑戦してみたいの」

× × ×

アリサとラウラ、その声を、控え室の入口で聞いてしまい。

アリサ　「（小声）挑戦……？」
ラウラ　「（小声）何のことかしら？」

と、アリサが手に持っていたトレイ

が傾いて、床に落ちるハッピーモナくん。

アリサ　「あ！」

途端に、カタカタと腕を振りながら走りだすハッピーモナくん。

×　×　×

セリーヌ　「フギャアアア！」

カタカタ走ってきたハッピーモナくん人形に気付いて、襲いかかるセリーヌ！

エマ　「え……⁉」

セリーヌに引っかかれて、モナくん人形は哀れボロボロに。
そこに、アリサとラウラが出てきて、

アリサ　「モナくんじゃなかったのね」
ラウラ　「おもちゃだったとは……」
エマ　「アリサさん、ラウラさん……！」

アリサとラウラ、慌てて、

アリサ　「あ！　ごめんなさいっ！」
ラウラ　「盗み聞きする気はなかったのだ！」
エマ　「二人とも、どうしてここに？」

セリーヌを抱き上げながら言うエマに、

アリサ　「あの、実は、エマがスカウトされてるところを見ちゃって……」
ラウラ　「このような場に、クラス委員長のお主が出るなど、その、気になってな……」

ためらう二人に、エマ、微笑んで、

エマ　「……そうですよね。私には似合わないかもしれません。でも……。私自身のために……やってみようと思ったんです」
アリサ　「自分のために？」

エマ、頷くと、小さなマイクを見せる。
それはおもちゃの宝石がついた、キラキラと輝く物だ。

エマ　「私には、幼馴染みの姉さんがいました」

□エマの回想――

幼いエマと一緒に唄う綺麗な女性の姿。
（※実はヴィータ・クロチルダだが顔は見せず）
エマはおもちゃのマイクを持っている。

エマの声　「とても綺麗な声で、幼い頃の私に歌を教えてくれた、憧れの人でした」

――幼いエマに手を振り、去って行く女性。

エマの声　「ですが、姉さんはその才能を見いだされて、海外へ行き――」

――その女性が、海外のミュージカルステージできらびやかに唄う姿。
――そして、拍手喝采を受ける姿。



エマの声　「ミュージカルの大スターとして活躍するようになり、今の私では、会うこともできなくなったんです」

――現在のエマが、自室で発声の練習や、鏡の前でダンスのステップを踏む姿。

エマの声　「それから私は、内緒で、発声やダンスの練習をしてきました。いつかステージで、私も活躍できるようになれば……」

□回想戻って――

エマ　「胸を張って、姉さんに同じ舞台で会えるかもしれない。だから、このオーディションに、チャレンジしてみようと思ったんです」

聞き入っているアリサとラウラ。

アリサ　「そういうことだったの……」
ラウラ　「人知れず頑張っていたのだな」
エマ　「恥ずかしくて、ずっと誰にも話していなかったのですが……」

顔を赤らめ、俯くエマ。

ラウラ　「うん。ならば、存分にやるがよい！」
アリサ　「夢があるって、素敵なことよね！　私達も応援するわ！」

笑顔で言い、うなずくアリサとラウラ。

エマ　「アリサさん、ラウラさん……！」

二人の言葉に驚くエマ。

□同・ステージ上

ユーシスがステップを踏んで、クルリと華麗に一回転。

ユーシス　「……フッ」

曲が終わって、決めポーズをすると同時に――。

「きゃあああ！」
「素敵ーーっ！」

などと、会場の女子から黄色い声援が送られる。
ヴィヴィとリンデも客の中にいて、

ヴィヴィ　「ちょっと動きがキモかったけど、やるじゃない」
リンデ　「私には無理かも……」

マキアスも悔しがりながら、

マキアス　「なぜだ！　なぜだか分からんが……奴には猛烈な敗北感を禁じ得ないぞ……！」
エリオット　「前世の因縁とか？」

司会がマイクを手に、

司会　「見事なパフォーマンスでした！　では、最後にお名前と出身地を！」

その言葉に、ピクッと反応するユーシス。

ユーシス　「なに？」
司会　「ですから、お名前を……」
ユーシス　「あいにくだが。人間どもに名乗る名など、

持ちあわせてはいない」

客席がざわつく中で、

ユーシス　「我が友に出会えるかと期待したが……。こんなくだらぬ茶番に付き合わされるとはな。失礼させてもらおう」

と、去ろうとするユーシス。

マキアス　「ちょっと待ったーっ‼」

客席で大声と共に立ち上がるマキアス。

マキアス　「僕は断じて許さないぞ！　そんな人を見下した態度でアイドルだなんて、絶対にありえないっ‼」

熱く語るマキアス。

ユーシス　「フン、庶民が」

バッサリ切って捨てるユーシス。

マキアス　「な、なんだとっ！」

ユーシス　「貴様らになど用はない。俺は探しているのだ……我が主。魔界皇子を！」

体から魔界のオーラを発するユーシス。

その気配に、

モナ　「モナっ⁉」

と、反応するエリゼの膝の上のモナくん。

□同・トイレ

リィン　「ぐうううっ⁉」

黒いオーラが体から浮かび、右手の激痛に襲われるリィン。

リィン　「やめてくれ……！　この痛みは……この痛みは、何なんだああっ！」

ドンッとオーラがリィンの体からほとばしる。

□ステージ前

客席のマキアスと睨み合っていたユーシスが、

ユーシス　「……む！」

ハッとその気配に気付き、

ユーシス　「（M）これは……もしや！」

マキアス　「どうした！　この僕に、怖じ気づいたかっ！」

エリオット　「落ち着きなよ、マキアス。オーディションの進行妨害だよ」

ユーシスがマキアスを無視して、舞台袖の方へ歩き出した時である。

ドゴオオン！

と、舞台袖で爆発が起こり――。

ユーシス　「ぬうっ……！」

瓦礫に襲われるユーシス。

マキアス　「うわっ⁉」

トワ　「なになにっ⁉」

エリゼ　「きゃっ⁉」

驚く観客達と、売り子のトワ。



クロウ　「おっと……！」

咄嗟にエリゼの前で瓦礫を受け止めるクロウ。

その隙に、モナくん、ピョンとエリゼの膝からジャンプして逃げ出す。

×　×　×

楽屋にも――

その爆発音は響いていて、

アリサ　「なに⁉」

ラウラ　「爆発……⁉」

エマ　「……セリーヌ！」

脅えるセリーヌを抱くエマ。

×　×　×

ステージ上。

爆煙の中から――。

声　「うずく……。我が右手がうずく……！」

ハッとなる客席の人々。

マキアス　「こ、この声は……！」

エリオット　「いやな予感しかしない……」

バッと煙を払って姿を現したのは、

魔界皇子　「人間共よ！　この右手の疼きを癒やすため、皇子の印を差し出すがよいっ！」

舞台上で決めポーズを取る魔界皇子！

エリゼ　「へ、へ、変態ですわっ！」

またもドン引きするエリゼ。

司会　「君、進行の邪魔だから……！」

止める司会から、皇子、マイクを奪い、

魔界皇子　「ふはははは！　ちょうどよい物があるではないか。行け！　我が力を、人間共に知らしめるのだっ！」

マイクが黒いオーラに包まれて、巨大な怪物となった。

怪物　「オンエアーーッ！」

叫ぶ怪物。

「きゃあああ！」

と、たちまち悲鳴に包まれるオーディション会場。

ユーシス　「おおっ……！」

ユーシス、瓦礫の中から立ち上がり、

皇子の姿を見て感激し、

ユーシス　「皇子っ！」

と、駆け出そうとした時である。

魔界皇子　「俺に、近よるなあっ‼」

オーラを右手から放つ魔界皇子。

ユーシス　「なにっ⁉」

喰らって吹っ飛ばされるユーシス。

マキアス　「何なんだ、あいつらは⁉」

エリオット　「仲間割れ的な？」

と、怪物が客席の方を向き、

怪物　「オンエアアアアッ！」

音波を放つ！

マキアス「うわああっ！」

眼鏡にヒビが入るマキアス。

エリゼ「(耳を塞ぎ) きゃあっ！」

クロウ「くっ！　逃げるぞ！」

エリゼや、クロウ、マキアス、エリオットら、一斉に客席から逃げ出す

モナ「たっ、大変モナ……！」

と、逃げ惑う客の足元を、慌てて楽屋に走って行くモナくん。

それをトワがバッチリ目撃して、

トワ「ええっ⁉　モナくんが……！　ほんとに走ってるーーーっ⁉」

×　×　×

ステージ上では――

立ち上がったユーシスが、皇子に、

ユーシス「俺を、憶えていないのか⁉」

魔界皇子「誰だ？　貴様はあああっ！」

ユーシス「なっ……！」

皇子の叫びに呼応して、

怪物「オンエアアアアア！」

会場を音波で破壊し始める怪物。

ユーシス「ぐわっ！」

ユーシスも音波を食らい、ダメージを受ける。

魔界皇子「ゆけえええ！」

怪物「オンエアアアア！」

怪物は壁を破壊し、外へと向かっていく。

ユーシス「くっ……待て……。リィン……」

## □　同・関係者入口

アリサ「こっちよ！」

ラウラ「とにかく避難だ！」

出てきたアリサ、ラウラ、エマ。

そこに――

モナ「アリサ、ラウラ！　変身モナ‼」

と、駆けてくるモナくん！

アリサ「あ……！」

ラウラ「む……！」

エマ「え⁉」

モナくんと目が合うエマ。

モナ「モナッ⁉」

セリーヌ「キシャアアアア！」

エマに抱かれていたセリーヌが、モナくんに襲いかかって引っかきまくる。

モナ「モナ、モナ、モナアアアア⁉」

エマ、その様子に驚いて、

エマ「あ、あのっ⁉　そ、その子、しゃべってますよね⁉」

モナ「ひいいっ！　助けてモナアア！」

エマ「セリーヌ！　やめなさい！」



セリーヌ、モナを引っかきまくっていたが、エマの声で動きを止めた。

と、その横で、

怪物「オンエアアアア！」

壁を突き破って出てきた怪物。

エマ「えっ……！」

アリサとラウラ、覚悟を決めて、怪物の前に進み出ると、

アリサ「今は事情を話してる暇はないわ！」

ラウラ「御免っ！」

素早くアークスを掲げるアリサとラウラ。

――変身BANK。

二人、ARCUSの光に包まれ、空中に飛び出し、変身を始める。

目を閉じ、ARCUSと融合した宝石を胸に当て、神々しい光に包まれるアリサ。

まじかる☆アリサ「あなたに届け！　愛と希望と魔法の戦士！」

ARCUSと融合した竹刀を持ち、かっこよくポーズを決めて、光に包まれるラウラ。

まじかる☆ラウラ「そなたに届け！　力と勇気と魔法の戦士！」

アリサがピンク色の服を着た、魔法少女まじかる☆アリサに変身！

まじかる☆アリサ「魔法少女！　まじかる☆アリサ！」

ラウラが青色の服を着た、大剣を手にした魔法少女まじかる☆ラウラに変身！

まじかる☆ラウラ「魔法少女！　まじかる☆ラウラ‼」

二人、スタッと着地し、かっこよく決めポーズした。

エマ「……！　お二人が、変身……⁉」

まじかる☆アリサ「大事なオーディションを台無しにするなんて……！」

まじかる☆ラウラ「我が友が、夢のために一歩を踏み出そうとしていたのだぞ……！」

エマ「……！」

ハッとなるエマ。

魔界皇子「ククク。この俺には関係ないことだ！　行くぞ！　魔法少女よっ……！」

アリサとラウラにオーラの攻撃を放つ！

まじかる☆ラウラ「効かぬっ！」

大剣ではじき飛ばすラウラ。

弾かれたオーラが怪物を直撃。

怪物「オンエアアア⁉」

×　×　×

怪物がぶつかって壁が崩れ落ちて――。



避難していたトワに、瓦礫が迫る。

トワ「……ああっ！」

思わず目をつぶるトワだったが、ガシッと何者かの手が瓦礫を受け止めた。

トワ「え……⁉」

目を開くと、その前にいたのは謎の仮面の戦士《C》。

《C》「……」

《C》、無言で瓦礫を払うと、バッと建物の屋根に飛び上がっていく。

トワ「だ、誰っ……⁉」

× × ×

まじかる☆ラウラ「アルゼイドが秘剣、篤と見よ！　奥義・洸刃乱舞！　はあああっ！」

猛烈な剣撃で皇子を吹っ飛ばすラウラ。

魔界皇子「くうぅっ！　相変わらずの、フィジカル少女めがっ……！」

ダメージを受けるが、何とか立ち上がる。

まじかる☆アリサ「こっちは二人なのよ！　舐めないでくれるかしら！」

そう言うと、トゥインクル・スターを光と共に出現させるアリサ。

まじかる☆アリサ「今度こそ、仕留めてみせるわ！」

魔界皇子「させるかっ！」

オーラを放つ皇子。

皇子に狙いを定め、弓を引き絞るアリサ。

まじかる☆アリサ「はあああああっ！」

愛の力が矢の先に集中して――。

まじかる☆アリサ「あなたにお届け！　愛と希望の流れ星！」

グッと引き絞った弦を解き放ち、

まじかる☆アリサ「まじかる☆アリサ！　ラブ・シューティングスター‼」

愛の力を込めた虹色の矢を撃った。

虹色の矢はオーラをはねのけ、皇子に向けて突き進む。

魔界皇子「くうぅっ⁉」

万事休すかと思われた時である！

ユーシス「シュトラーール！」

叫び声と共に、白馬に跨がったユーシスが駆けてくる！

ユーシス「はあああああっ！」

馬上から飛び降り、アリサの虹色の矢の前に立ちはだかるユーシス。

ユーシス「（両手を広げ）っ‼」

次の瞬間、爆発に包まれる周囲。

まじかる☆アリサ「ええっ⁉」

まじかる☆ラウラ「技を、受けただと……⁉」

　煙が晴れると、上半身のシャツが破れたユーシスが、片膝を突きながらも、皇子を守っていた。

魔界皇子　「お、お前……っ⁉」

　戸惑う魔界皇子に、

ユーシス　「阿呆が……」

　と、クールな表情で言い、

ユーシス　「生まれた日より、貴様に誓ったこの俺の忠誠。忘れたとは言わせんぞ……」

　その頬の傷から僅かに血が滲む。

魔界皇子　「！　――」

まじかる☆アリサ　「あの変質者……！」

まじかる☆ラウラ　「魔界皇子の部下だったのか⁉」

　ユーシス、立ち上がり、剣を構えると、

ユーシス　「部下だと？　笑わせるな！」

　ザッと踏み込み、アリサとラウラに剣撃を加えるユーシス。

　アリサに一撃を食らわせ、

まじかる☆アリサ　「きゃあああっ！」

　吹っ飛ばされるアリサ。

まじかる☆ラウラ　「ぬううううっ！」

　振り下ろされたラウラの大剣を、ユーシス、剣で払い、すかさず蹴りをくらわせる。

まじかる☆ラウラ　「うぐっ……！」

ユーシス　「俺は魔界皇子の剣となり、盾となる男……。魔界貴族ユーシス・アルバレア！」

　剣を構えてかっこよく言う。

まじかる☆アリサ　「魔界……！」

まじかる☆ラウラ　「貴族……！」

　その姿を見て、頭を抱える皇子。

魔界皇子　「ぐううっ……⁉」

　×　×　×

　フラッシュバック――幼い頃の皇子に、幼いユーシスが跪く姿が一瞬蘇る。

　×　×　×

魔界皇子　「何なんだ……これ……は」

　その場に倒れ伏す皇子。

　ユーシス、シュトラールに跨がり、

ユーシス　「はあああああっ！」

　馬上からの剣術を、アリサとラウラに繰り出す。

まじかる☆ラウラ　「おのれ！　馬上からとは、卑怯な！」

まじかる☆アリサ　「間合いが……遠い！」

　二人、ユーシスの剣撃を受け、忽ち壁に追い詰められてしまう。

ユーシス　「魔法少女など、この程度か」

　剣を突き付けるユーシス。

アリサとラウラ　「……！」

　その時である――。



エマ　「やめて下さい！」

　エマが駆けてきて、

まじかる☆アリサ　「エマ……！」

　アリサとラウラを守り、両手を広げて立ちはだかった。

まじかる☆ラウラ　「危険だぞ、エマ！」

ユーシス　「どけ」

エマ　「いいえ、どきません！　二人は、私の夢を、応援してくれたんです……！」

モナ　「モナ……！」

　ARCUSが輝き出す。

エマ　「そんな二人のために、今度は私が力になりたいんです！」

　その思いにARCUSが反応し――カッと輝いて、エマのポケットに入っていた、おもちゃの小型マイクと融合！

ユーシス　「（目を覆い）ぬうう⁉」

エマ　「え……！」

　――変身BANK。

　エマ、ARCUSの光に包まれ、空中に飛び出し、変身を始める。

　目を閉じ、ARCUSと融合して杖に変化するマイクを手にして、神々しい光に包まれるエマ。

まじかる☆エマ　「みんなに届いて！　歌と光と魔法の戦士！」

　エマがワインレッドの服を着た、魔法少女まじかる☆エマに変身！

まじかる☆エマ　「魔法少女まじかる☆エマ！」

　顔を上げたエマ、眼鏡が消え、髪が解けて、優しく微笑む。

ユーシス　「さ、三人目だと⁉」

　エマ、スッと息を吸うと、

まじかる☆エマ　「（歌声）はあああっ」

　その声によって震動が起こり、

ユーシス　「ぬうっ！」

　押し返されるユーシス。

まじかる☆アリサ　「エマ……！」

まじかる☆ラウラ　「そなたも魔法少女に……！」

　立ち上がる二人。

まじかる☆エマ　「二人とも……！　今です！」

　アリサとラウラ、頷くと、

まじかる☆アリサ　「たあああっ！」

　アリサのジャンプキックが、ユーシスに直撃。

ユーシス　「ぬうっ⁉」

まじかる☆ラウラ　「喰らええええい！」

　大剣を振り抜いて、

ユーシス　「くっ！」

　何とか腕で受け止める。

　その隙に、エマは怪物に向かってい

き、

まじかる☆エマ　「やあああぁっ！」

踊るように舞いながら、怪物の音波をかわし、杖を振ると――。

魔法の攻撃が怪物に直撃する。

怪物　「オンエエエ……」

弱った怪物の前で、杖を構えるエマ。

まじかる☆エマ　「そびえ立て、巨いなる塔！」

怪物を取り囲むように現れる四本の塔。

まじかる☆エマ　「ロードアルベリオン！」

その中心部から魔法の光が飛び出して、怪物を包み込む。

怪物　「オンエアアアア！」

まじかる☆エマ　「静かに眠って下さい」

そう言い、目を閉じるエマの背後で浄化される怪物。

まじかる☆アリサ　「やったわ！」

まじかる☆ラウラ　「ああ！」

と、そこに馬のいななきが響き、

三人　「！」

ユーシスの声　「この場は預けた！」

見ると、シュトラールに跨がったユーシスが、気絶した皇子を背に乗せていた。

ユーシス　「魔法少女よ……！　魔界貴族の名において、必ずや倒してくれる！」

そう言い残して去って行くユーシス。

×　×　×

その様子をビルの屋上から伺っている黒い影――《C》の姿があって。

□　戦い終わって――

元に戻ったステージ前。

ラウラ　「結局、オーディションは中止か」

アリサ　「仕方ないわね……」

エマ　「いえ、お二人のお陰で、勇気がわいてきました。また今度、チャレンジしてみることにします！」

笑顔のエマに、

モナ　「モナ！　そんなことより、魔法少女の説明モナ！　そもそも、魔法少女ということは、誰にも知られてはいけないモナ！　ばれたら……」

セリーヌに懐かれているモナくんが、説明しようとした時――。

トワ　「ねえねえ、みんな！」

と、駆け込んでくるトワ。

トワ　「凄かったよね！　また魔法少女が街を救って……！」

アリサとラウラ　「え！」

モナ　「モナっ⁉」



トワ

モナくんが喋っているところを思い切り目撃するトワ！

「……モナくんが……！　しゃしゃ、しゃべったーっ！」

顔面蒼白のアリサ達で――。

〈つづく〉



## ⚜第4話『モナくんを追え！』

## ⚜登場キャラクター

アリサ・ラインフォルト（まじかる☆アリサ）
ラウラ・S・アルゼイド（まじかる☆ラウラ）
エマ・ミルスティン（まじかる☆エマ）
モナくん

〇

クロウ・アームブラスト
トワ・ハーシェル
ミリアム・オライオン
《C》

〇

リィン・シュバルツァー（魔界皇子リィン）
ユーシス・アルバレア（魔界貴族ユーシス）
シュトラール

□ マクモナルド・全景

□ 同・店内

モナ　「モナ〜〜〜！　生き返るモナ〜！」
　ズズッとジュースをストローから吸ったモナくんが、プハーと息を吐く。
　その前で、トワがアリサ、ラウラ、エマから話を聞いていて、
トワ　「ふむふむ。アリサちゃんと、ラウラちゃんと、エマちゃんの三人が、魔法少女になったんだね！　凄いねーっ！」
　タブレットにメモっていくトワ。
エマ　「ええ、そうなんです！　気付いたら、二人のように変身してまして……！」
　アリサ、ラウラに耳打ちして、
アリサ　「ねえ、こんなにペラペラ喋って大丈夫なの……？」
ラウラ　「見られた以上、致し方あるまい……」
　×　×　×
　回想——前話ラストより。
　モナくんが喋っているところを思い切り目撃するトワ！
　×　×　×
トワ　「それで、モナくんは、モナの国の国王様なんだね？　どうしてこの世界に⁉」
　タブレットにどんどんメモるトワ。
モナ　「フフフ、秘密モナ。それ以上知りたいなら……。おかわりモナっ！」
　ジュースの紙コップを差し出すモナくん。
アリサ　「そんな場合じゃないでしょっ！」
　全力でツッコミを入れるアリサ。
モナ　「ぶべらモナっ！」
　吹っ飛んで窓に叩きつけられるモナくん。
モナ　「い、いきなり、何するモナ……！」
　ヘロヘロで立ち上がるモナくんに、アリサが詰めよって、
アリサ　「言ってたわよね。魔法少女が他の人にバレたら私達はモナになるって！　あの話はどうなったのよ⁉」
モナ　「も、モナっ！　そ、それはっ……！」
　汗ジトで目を逸らすモナくんで。

□ オープニング

□ 前シーンより

エマ　「わ、私達がモナに⁉　そ、そんなっ⁉」
　慌てて自分の手のひらを見るエマ。
ラウラ　「そういえば、何も問題ないな……」
　ラウラも自分の手を見る。
トワ　「え⁉　モナになるって、本当なの⁉」
アリサ　「魔法少女になってから、真っ先に忠告されたんですけど……」
　ラウラ、モナに顔を近づけて、
ラウラ　「むしろ、そなたの姿になるのは光栄なのだがな……。ウフフ……」
　うっとりした表情になって、涎を垂らす。
　×　×　×
　イメージで——
　モナ化したラウラが、モナエマ、モナアリサ、モナくんと輪になって、おしくらまんじゅうしたりする姿。
　×　×　×
モナラウラ　「アハハハ！　ウフフフ！」
　×　×　×
　あっちの世界に行ったラウラを、アリサが呆れて見つつ、
アリサ　「ああもう、また始まった……」
　モナくん、腕組みして真顔になり、
モナ　「フフフ。よく思い出してみるモナ」
　×　×　×
　回想——#2より。
　変身する姿をラウラに目撃されるアリサ。
　——#3より。
　同じくエマに目撃されるアリサとラウラ。
モナの声　「ラウラに変身を見られた時も、エマに見られた時も、実は何も起こっていなかったモナ！」
　×　×　×
アリサ　「言われてみれば、確かに……」
モナ　「つまり……アレは……」
アリサ　「あれは……⁉」
モナ　「秘密を守るための方便！　嘘ということモナーーっ！」
アリサ　「えええええーーっ⁉」
　ズッコケるアリサたち。
トワ　「あはははっ。よかったよね。モナにならなくて」
エマ　「ええ、確かに……」
アリサ　「ほんとにもう……」
　アリサ、気を取り直してジュースを飲み、
アリサ　「そういや、あいつ……魔界貴族って言ったかしら？」
ラウラ　「ああ。あの謎の仮装男か」
アリサ　「魔界皇子を助けに来たみたいだけど、いったい何者なのかしら……」
エマ　「そもそも、魔界皇子さん……とは、何なのでしょうか？」
トワ　「それなら、私もちょっとだけ調べてみたんだよ！」

笑顔でタブレットの画面を見せるトワ。

□ サブタイトル

□ 線路のガード下（夕方）

電車が警笛を鳴らして走りすぎていく。
轟音が響く薄暗いガード下の中で——。

リィン「ぐ……うう……」

魔界皇子の変身が解けたリィンが、目を覚ました。

リィン「ここは……」

辺りを見渡すと、

声「ようやく目覚めたか……」

カツンカツンと歩み寄ってくる足音。

リィン「！　お、お前は⁉」

外から差し込む夕陽を背景に、照らし出されるマントを翻す男の姿。
それは、魔界貴族の衣装を纏ったユーシスであった。

ユーシス「（リィンを見つめて）……」

□ マクモナルド・店内

タブレットを操作しているトワ。

トワ「実はね、怪物がこの街に現れた日から、記録につけてたんだけど」

地図に幾つかのピンが指されており、

アリサ「これって……⁉」

トワ「魔界皇子の出現場所だよ！」

タブレットを素早くタップして出現地点をピックアップするトワ。

アリサ「マクモナルドに……」

ラウラ「学校の体育館……」

エマ「それに、オーディション会場ですね」

その場所は、マクモに、体育館に、コンサート会場を示している。

トワ「何か共通点がないかなって、ずっと考えてたんだけど……。ようやく分かったよ」

そう言い、アリサを見やるトワ。

アリサ「え……？」

トワ「アリサちゃんがいるところだよ！」

アリサ「わ、私が⁉」

驚くアリサ。

トワ「うん。魔界皇子が言ってた『皇子の印』とかっていうの。それを探してるんじゃないかな？」

エマ「皇子の印……？」

アリサ「何のことかしら？」

途端に、モナくんが飛び上がって、

モナ「最初に説明したモナ！　アリサのペンダントの宝石が、皇子の印だモナ！」

ピョンピョンとアリサの胸元を指さすモナくん。

アリサ「これが……⁉」

驚いて、ペンダントを取り出すアリサ。
そこには赤い宝石が輝いている。

ラウラ「綺麗な色をしてるな」

エマ「ええ、吸い込まれるような赤……」

トワ「前に見せて貰ったとき、少し光ってたよね？」

アリサ「そういえば……」

モナ「不思議な力を感じるモナ……。モナもその宝石の力に引かれて、この世界に逃げてきたモナ！」

エマ「モナさんは、なぜご自分の国から逃げてこられたんですか……？」

モナ「それはモナ……（真顔になり）語るも涙、聞くも涙の壮大なストーリーが……」

そこに——。

クロウ「よっ！」

と、笑顔で店に入ってくるクロウ。

モナ「！（固まり）」

クロウ「どうした、みんなお揃いで？」

アリサ「あ、い、いえ、何でも……！」

トワ「ご注文ならどうぞー！」

営業スマイルで立ち上がるトワ。

クロウ「おう、いつものでな」

トワ「まーた。そんなこと言って～」

と、トワ、アリサを振り返り、

トワ「（小声）続きはまた今度ね。みんなのたまり場にしちゃっていいから」

アリサ「あ、はい！」

ラウラ「かたじけない……」

トワとクロウが離れると、モナ、プハッと息を吐いて、

モナ「ふう～っ。ぬいぐるみのふりも大変モナ～～！」

×　×　×

マクモの外——
モナくんが話している姿に被り、

声「見ーつけた……！」

ニヤリと笑い、電柱の上に立って店内を見つめている少女。

ミリアム「フフ、今度こそ逃がさないよー」

ピョコンと動くウサミミを装着したミリアムであった。

□ ガード下

水たまりを踏むリィンの足。

リィン「ハァハァハァ……！」

ユーシス「……」

ゆっくり歩み寄るユーシスから、必

死に逃げていくリィン。

リィン「何なんだ……何なんだ、いったい!?」

と、ガード下から出ようとした時。

ユーシス「シュトラール！」

その声に応えて、

シュトラール「ヒヒヒーン！」

と、ガードの出口に立ちはだかる白馬のシュトラール。

リィン「うわああっ！」

シュトラールにぶつかり。転んでしまうリィン。

その前に、スッと手が差し出される。

リィン「……！」

ユーシス「……」

無言で手を伸ばし、リィンを見やるユーシス。

リィン「お、お前は、誰なんだ……」

頭を押さえたリィンは、まだ記憶が戻っていない様子だ。

ユーシス「……憶えていないのか？　この俺を……ユーシス・アルバレアを！」

リィン「う……ぐ……」

頭を押さえるリィン。

×　×　×

その脳裏に——魔界皇子として戦った時の様子が次々にフラッシュバック。

リィン「……こ、この記憶はなんだ!?　これが……俺なのかっ……!?」

ユーシス「ああ。お前こそが我が友、魔界皇子リィン！」

差し出されたユーシスの手に、ゆっくりと右手を伸ばすリィン。

リィン「う、ぐ……」

右手の革手袋は破れて、手のひらが剥き出しになっており、そこで黒く光る宝石。

ユーシス「そうだ……。思い出せ。その両手に皇子の印を宿した者……。お前こそが……！」

そこまで言って、ハッとなるユーシス。

ユーシス「なに……!?」

慌ててリィンの左手を見やる。そこには宝石は嵌まっておらず、

ユーシス「どういうことだ!?　印が半分しかない……これではお前は……」

左手を取るユーシスを、

リィン「やめてくれっ！」

と、振り払うリィン。

リィン「俺は、魔界皇子なんかじゃない……。俺は……リィン・シュバルツァーだ！」



叫んだ瞬間、ブワッとリィンから漆黒のオーラが立ち昇る。

ユーシス「っ……!?」

そのオーラに撥ね飛ばされ、壁に叩きつけられるユーシス。

ガードの外にあるカーブミラーに、オーラを発するリィンの姿が映る。

リィン「(それを見て）う、うわあああっ！」

叫びながら、ガード下から逃げ出していくリィン。

ユーシス「く……」

見送るしかないユーシス。

ユーシス「俺は諦めぬぞ。お前が記憶を……。皇子の印を取り戻すまでは……！」

静かに決意して。

□ マクモナルド・店の前

——外の陽が傾いていて。

アリサ「それじゃあ、失礼します！」

トワ「(手を振り）うん。またねーっ！」

モナくんを抱えて出て来るアリサと、ラウラ、エマ。

ラウラ「結局、あまり話は出来なかったな」

エマ「ええ。クロウさんがそばにいましたからね」

モナ「モナの壮大なストーリーは、またの機会に話すモナ！」

アリサ「どうせ、大したことないんでしょ？　バレたらモナになるって嘘ついてたし」

モナ「モナ！　今度は嘘つかないモナ！」

などと話していた時である。

——ニュッと、モナくんの上から伸びてくるマジックハンド。

モナ「モがっ……!?」

アリサ「えっ!?」

モナくん、一瞬でマジックハンドに掴まれてしまい——。

ミリアム「ふふっ。もーらいっ！」

なんと、電柱の上に立っていたミリアムに、捕らわれてしまった。

エマ「あ……！」

アリサ「ちょっと、何なの!?」

ミリアム、マジックハンドを外して、モナくんをガシッと掴む。

モナ「い、痛いモナ！　離すモナーっ！」

ラウラ「こら！　返すのだ！　そのモナはモナでも特別なモナでな……！」

ミリアム「知ってるよ、モナ国王だよね」

モナくん、その言葉にハッとなり、

モナ「モナーーっ！　お、お前はモナっ！！」

ミリアム「ニシシッ！」

ニヤッと笑うミリアム。

ミリアム「ボクは白ウサギ——。ミリアム・オライオン。モナ国王、キミを連れ戻しに来たよ！」

そう言うと、ジャンプし、商店街の屋根を伝って身軽に逃げていくミリアム。

アリサ「ちょ、ちょっと！」

エマ「待って下さい！」

慌ててミリアムを追っていくアリサ達。

× × ×

クロウ「……」

その様子を、マクモの店内で、トワと話していたクロウがチラッと見やって。

□ 商店街——

ミリアムを追って、商店街を走るアリサたち。

アリサ「待ちなさーーいっ！」

ラウラ「モナの独り占めはよくないぞ！」

エマ「ぬいぐるみなら、お店にありますから！ 交換しましょう！」

アリサ「って！ そんなことじゃないと思うわよ！」

ラウラ「あの者、秘密を知ってるようだな！」

ミリアム、追って来るアリサ達を振り返ると、

ミリアム「ニシシ、しつこいなぁ。出てきて、ガーちゃん！」

瞬時に、空中に出現する謎のロボット——アガートラム。

ミリアム「行くよっ！ ガーちゃん！」

アガートラム、機械のような声を発すると、ミリアムを抱えて空に飛び上がっていく。

モナ「助けてモナ〜っ！」

ラウラ「ぬぅ！ 空に逃げるとは、卑怯な！」

アリサ「どうすればいいの⁉」

エマ、はたとひらめいて、立ち止まり、

エマ「あ、あのう……」

アリサ「え？」

ラウラ「なんだ⁉」

エマに注目するアリサたち。

エマ「私達、魔法少女ですし……。空などは飛べないのでしょうか？」

アリサ「そういえばっ！」

ハッと気付くアリサたち。

アリサ「今まで、変身以外じゃ魔法らしいことは何ひとつやってなかったわ！」

ラウラ「うん。言われるまで気付かなかったな！」

エマ「きっと犬や猫とお喋りできたり、お花を育てたり、素敵な魔法が使えるのではないでしょうか！」

アリサ「そうよ！ ホウキとか出てこないのっ⁉」



×　×　×

モナ　「そ、そうだったモナ！」

連れ去られながら、叫ぶモナくん。

モナ　「ARCUSに向かって、モナークモナーク！　と魔法の呪文を叫ぶモナーっ！」

ミリアム　「うるさいよ。黙っててー」

モナくんの口を塞ぐミリアム。

モナ　「モガガガっ！」

×　×　×

アリサ、ラウラ、エマ、それを聞き、一斉にARCUSを取り出すと、

アリサ　「（汗ジト）まさかの、あいつの名前入り呪文……」

エマ　「少し恥ずかしいですが」

ラウラ　「望むところだ！」

アリサ　「せ、せーの！」

三人、ARCUSを掲げると、

三人　「モナークモナーク！」

次の瞬間、ARCUSが光り、

三人　「ホウキよ、出て来て！」

パッと輝きを増した光の中から、ホウキが飛び出して来た！

アリサ、ホウキを掴むと、

アリサ　「よし、追うわよっ！」

ホウキに跨がるアリサ、

ラウラ　「ああ！」

ラウラも跨がり、エマは横乗りで。

エマ　「はいっ！」

アリサを先頭に、空に飛び上がっていったところで——。

〈中CM〉



## □　町の上空——

アリサを先頭に、ホウキで空を飛んでいくラウラとエマ。

アリサ　「待ちなさいっ！」

ホウキに跨がっているアリサとラウラ。

その先を、アガートラムに乗ったミリアムが飛びながら逃げていく。

ミリアム　「へへっ！　待てと言われて、待つわけないよーだっ！」

ラウラ　「我が心の友、モナくんを返すのだ！」

モナくん、ミリアムの手元で、いつの間にか鳥カゴに捕らえられていて、

モナ　「モナーーっ！　モナは鳥じゃないモナ！外に出すモナっ！」

スピードアップするアガートラム。

アリサ　「くっ……早いわっ！」

ラウラ　「逃がさんぞっ！」

エマは優雅にホウキに横乗りしつつ、

エマ　「あの……！　お二人とも！　そんなに声を出すと……！」

眼下には人通りの多い商店街。

×　×　×

その中を、マキアスとエリオットが歩いていて、

マキアス　「む？」

夕焼け空を見上げるマキアス。

チラッと、飛び去るアリサ達の姿が見えてしまった。

×　×　×

アリサ　「ああっ！　み、見られちゃう！」

慌ててスカートを押さえるアリサ。

エマ　「こういう時こそ、魔法です！」

ARCUSを掲げるエマ。

エマ　「モナークモナーク！　雲よ、私たちを隠して下さい！」

途端に、ARCUSが光り輝く！

シュウウッとエマ、ラウラ、アリサたちを霧のように雲が包んで、その姿を隠していく。

×　×　×

地上のマキアス、ポカンと口を開けてその様子を見ていて、

マキアス　「あ、あれはっ……！」

思わず指さした先を、エリオットが見る。

エリオット　「え？」

そこには雲の塊しかない。

エリオット　「雲がどうかしたの？」

マキアス　「今！　あそこに、ホウキで空を飛ぶ美少女

たちがっ！」

大声を上げて必死に空を指さすマキアスに、通行人達がザワザワと騒ぐ。

エリオット、マキアスを哀れみの表情で見て、

エリオット　「マキアス……。眼鏡、オーディション会場でヒビ入ったままだよね？　直した方がいいよ」

マキアス　「だ、断じて違ーーうっ！」

× × ×

雲の中を飛んで行くアリサたち。

先頭を行くアリサ。

ラウラ　「さすが委員長だな！」

アリサ　「でも、これじゃ、あの子がどこに行ったのかも……」

その瞬間——。

目の前に突然現れる大きな煙突。

アリサ　「ひゃあっ！」

慌てて避けようとするアリサ。

アリサ　「ぶ、ぶ、ぶつかるわーーっ！」

スピードを落とせずに、あわや衝突かと思われたとき！

エマ　「モナークモナーク！　ホウキよ、止まって下さい！」

エマの魔法で、キキキーッと急ブレーキで止まるアリサのホウキ。

アリサ　「きゃあああっ！」

だが、急ブレーキのために、アリサはホウキから投げ出されて落ちていく。

ラウラ　「くっ……！」

パシッと、アリサの手を掴んで助け上げるラウラ。

アリサ　「た、助かったわ！」

戻って来たホウキに再び跨がるアリサ。

雲が晴れると、大きな銭湯の煙突がそびえていた。

アリサたち、辺りを見渡すと、アガートラムの姿は消えていて、

アリサ　「あの子はどこに⁉」

ラウラ　「見失ったか……！」

× × ×

ミリアム　「ニッシシシ……」

ニヤリと笑って、その様子を見下ろしているミリアム。

ミリアム　「こんなところに隠れてるなんて、気付かないよね」

ミリアム、煙突のてっぺんからピョコンと頭を出していて、モナくんの鳥カゴを抱いていた。

アガートラムは空で姿を消している。

× × ×

アリサ　「こうなったら……！」

ARCUSを掲げて、

アリサ　「モナークモナーク！　あの子の居場所を教えてっ！」

パッと輝くARCUS。

× × ×

すると——

地上の銭湯の釜がゴオオオと猛烈に燃えさかる。

× × ×

ミリアム　「ニシシ。このままやり過ごせば……ん？」

気付くと、モクモクと黒煙が煙突を昇ってきて。

モナ　「モナッ！　モゴッ！　ガハッ！　く、苦しいモナ！　死ぬモナっ！」

黒煙に巻かれるモナくんとミリアム。

ミリアム　「ちょ、ちょっと……何コレ！　ゴホッゴホッ！」

たまらず、煙突から飛び出すミリアム。

エマ　「いましたっ！」

アガートラムに乗ったミリアムを見つけるアリサたち。

ミリアム　「ああもうっ！　せっかく逃げきれたと思ったのに！」

モナ　「あ、危うくモナの燻製になるところだったモナ……」

ススまみれのミリアムに、アリサたち、素早く近寄っていき、

アリサ　「今度こそ逃がさないわよ！」

ラウラ　「返すのだ、私のモナくんを！」

と、相変わらずモナ愛溢れるラウラ。

モナ　「モナっ⁉　それは違うモナ！　モナはモナ国の王！　みんなのモナだモナ！」

アリサ　「はいはい。モナモナうるさい……」

三人、ミリアムを空中で取り囲む。

ミリアム、真っ黒のススを衣装から払って、

ミリアム　「もう。ボクの衣装が台無しだよ……。折角ご主人様にもらったのにさ……」

キッとアリサ達を睨むと、

ミリアム　「よくもやってくれたね！　オシオキだよ！　ガーちゃんっ！」

アガートラム、電子音で返事をすると、ギュンッとアリサ達に突っ込んでいく。

アリサ　「くっ！」

咄嗟に避けるアリサ。

エマ　「！」

エマ
　だが、背後に回り込まれるエマ。アガートラムが腕を振り回すが、

エマ「きゃっ！」
　何とか上昇してかわす。

ミリアム「ニシシ！　大したことないね！　魔法なんか使えたって、ガーちゃんの敵じゃないし！」

ラウラ「それはどうかな？」
　ラウラ、ニヤッと笑うと、ホウキの上に仁王立ちになって、

ミリアム「え⁉」

ラウラ「参るぞ！　はあああああっ！」
　なんと、背負っていた竹刀を構えて、アガートラムに突進！

ラウラ「鉄砕刃っ！」
　ガキンっと強烈な一閃を喰らわせた！

ミリアム「な、何それっ⁉」
　さすがに怯むアガートラム。

ラウラ「アルゼイド流の極意。例え空の上であれ、水の中であれ、我が剣閃が衰えることはないっ！」
　見得を切ると、再びアガートラムに向かい、

ラウラ「たあああっ！」
　激しい剣撃を浴びせる。

アリサ「（汗ジト）魔法少女が、ホウキに乗って剣で戦うって……」

エマ「私達も加勢しましょう！」

アリサ「え、ええっ！」
　アガートラムとミリアムに向かっていくアリサとエマ。

□　近くの公園
　――のベンチで休んでいるリィン。

リィン「ハァハァ……。俺の周りでいったい何が起こっているんだ……」
　頭を押さえて思い悩むリィン。
　そこに――。

ラウラの声「はあああっ！」
　ラウラたちの声が聞こえてくる。

リィン「む……⁉」
　驚き見上げると、空中で戦うアリサ達を発見した。

リィン「！　……な、なんだ⁉　ぐっ……。ま、またかっ……⁉」
　右手がブワッと黒光りを始める。

□　上空では――
　空中でもみ合う三人とアガートラム。

ミリアム「わ、わ！」

ラウラ「たあああっ！」
　ガツンと攻撃を受けたアガートラム、たまらずフラフラと落下を始める。

ミリアム「お、落ちるよーっ！」

アリサ「あ！」
　アリサのホウキにアガートラムの腕がぶつかり、ボキッと折れてしまい。

アリサ「いやあああああっ‼」

エマ「アリサさんっ！」
　空中で別々に落下していくアリサと、アガートラムミリアム。

ミリアム「ひゃあああ！」

モナ「モナアアアア！」

□　公園――

リィン「ぐうっ！　やめろ！　やめてくれっ！」
　右手を押さえて苦しむリィンの頭上から、

アリサの声「きゃあああああああっ！」
　と、叫びながら、アリサが落下してきた！

リィン「なっ⁉」
　咄嗟にアリサを受け止めようとするが、

アリサ「いやああああっ！」
　その視界にアリサの胸がどアップで迫り――！

リィン「ぐはっ！」
　またも顔面にアリサの胸を押しつけられて、気絶するリィン。

ラウラ「アリサ！　大丈夫かっ！」
　空から降りてきたラウラとエマが駆け寄ると、

アリサ「あいたたた……」
　リィンが下敷きになったおかげで、なんとか無傷のアリサ。

アリサ「だ、大丈夫みたいだけど……」
　胸の下で気絶しているリィンに気付く。

アリサ「きゃあああああっ！」
　慌てて飛び退くアリサ。

アリサ「リ、リィン⁉　まさか、見られた……⁉」
　エマがリィンを抱き起こすが、完全に意識を失っており、

エマ「いえ。気絶しているようです。きっと大丈夫でしょう」

ラウラ「うん、大きいからな。視界を遮るには十分だろう」

アリサ「な、何がよ、何がっ！」
　と、赤面して胸を隠すアリサ。

エマ「ひとまず、安静にしておきましょう。モナークモナーク！　リィンさんをベンチまで運んでください！」
　と、リィンが魔法で宙に浮かんで、

離れたベンチに寝かされる。
そこに――

ミリアム　「見つけたよっ！」
やや傷ついたアガートラムが、ドゴンとパンチを繰り出してきた。

アリサたち　「！」
咄嗟に飛び退くアリサ達。

ラウラ　「ぬううっ！　性懲りもなく！　いい加減モナくんを返すのだ！」
ミリアム、べーっと舌を出して、

ミリアム　「返さないよーだ。モナ王国をセイフクするには、国王を捕らえなきゃだめだって、魔王様に言われたんだから！」
その言葉に驚くアリサ達。

アリサ　「魔王⁉」

×　　×　　×

離れたベンチで、横たわるリィン。
その体が黒いオーラに覆われていき。
カッと目が見開かれる。

×　　×　　×

ミリアム　「ボクは魔王様の直属の部下ってヤツだよ。その伝説の魔法アイテム、ARCUSだっけ？」
アリサ達のARCUSを指さし、

ミリアム　「そいつを奪うために、魔王様の命令でモナ王国に攻め込んだんだよね。でも、国王のてぃんくる☆モナくんに逃げられて、この世界まで追って来たってわけ」

アリサ　「な、何よそれ！」

エマ　「酷いです！」

ラウラ　「そうだ！　てぃんくる☆モナくんという本名を、なぜ教えてくれなかった！」

モナ　「モナっ！　国王は、本名を晒さないものモナっ！」

アリサ　「そこじゃないでしょっ！」
ツッコミ入れるアリサに、

ミリアム　「そういうわけだから！　キミたちのARCUSも、一緒に貰っちゃうよ！」
ミリアムの指示で、アガートラムがアリサたちに向かってきた時である。
ガンっ！　と響く銃声。

アリサ　「え⁉」
銃撃がアガートラムを直撃し、間一髪のところで動きが止まった。

ラウラ　「銃声⁉」

ミリアム　「な、何なのさ⁉」
驚くミリアム。

□　街中――
遥か離れたビルの屋上で、狙撃銃を構えていたのは――



黒衣に身を包み、仮面を被った謎の男、《C》であった。

《C》　「フ……。さあ、現れるがよい……魔界皇子よ！」
と、公園に狙いを定めている《C》。

□　公園
アガートラム、ジジジとスパークし、機能停止して姿を消し、

ミリアム　「ガーちゃん！」
ザッとミリアムの前に立ちはだかるラウラ達。

ラウラ　「よく分からんが、ここまでのようだな」

ミリアム　「……！」
後ずさるミリアム。
だが、そこに――。

魔界皇子の声　「疼く……我が右手が疼く！」

アリサ　「この声は……！」
驚くアリサ達。
漆黒のオーラに包まれた魔界皇子が、アリサ達の前に現れた！

魔界皇子　「オオオオオオッ！　寄越せ！　我が皇子の印をっ！」

エマ　「魔界皇子さん……！」

ラウラ　「く……こんな時に……！」
ミリアム、フフッと笑って、

ミリアム　「へえ。オウジ……こんな所にいたんだね！　モナくんはボクの獲物だから、後はよろしくっ！」
と、逃げようとするが、

魔界皇子　「我が前から逃げることなど、許さぬわっ……！　おおおおおっ！」
右手から黒いオーラを放つと、タコの滑り台が怪物に変身して、

怪物　「アシハポーン！」
叫びながら、うねうね動く脚でミリアムに攻撃した。

ミリアム　「ひゃああっ！」

モナ　「モナっ！」
なんとか躱すミリアム、驚いて、

ミリアム　「まさかオウジ⁉　ボクのこと、憶えてないの？」
皇子、ズキンと痛む頭を押さえ、

魔界皇子　「我が名は、魔界皇子！　我が前にひれ伏すのだ！」
タコの怪物、アリサ達に向かっていく。

ラウラ　「く……！」

アリサ　「みんな！　変身よ！」

エマ　「ええ！」
素早くARCUSを掲げるアリサ、ラウラ、エマ。
――変身BANK。

　三人、ＡＲＣＵＳの光に包まれ、空中に飛び出し、変身を始める。
　目を閉じ、ＡＲＣＵＳと融合した宝石を胸に当て、神々しい光に包まれるアリサ。
まじかる☆アリサ「あなたに届け！　愛と希望と魔法の戦士！」
　ＡＲＣＵＳと融合した竹刀を持ち、かっこよくポーズを決めて、光に包まれるラウラ。
まじかる☆ラウラ「そなたに届け！　力と勇気と魔法の戦士！」
　目を閉じ、ＡＲＣＵＳと融合した杖を手にして、神々しい光に包まれるエマ。
まじかる☆エマ「みんなに届いて！　歌と光と魔法の戦士！」
　アリサがピンク色の服を着た、魔法少女まじかる☆アリサに変身！
まじかる☆アリサ「魔法少女！　まじかる☆アリサ！」
　ラウラが青色の服を着た、大剣を手にした魔法少女まじかる☆ラウラに変身！
まじかる☆ラウラ「魔法少女！　まじかる☆ラウラ‼」
　エマがワインレッドの服を着た、魔法少女まじかる☆エマに変身！

まじかる☆エマ「魔法少女まじかる☆エマ！」
　三人、スタッと着地し、かっこよく決めポーズした。
　――ＢＡＮＫここまで。
ミリアム「変身したっ⁉」
怪物「アシハポーン！」
　怪物、アリサ達に向かってくるが、
まじかる☆アリサ「たあああああっ！」
　ジャンプして、蹴りを食らわせるアリサ。
まじかる☆エマ「やあああっ！」
　続けざまにエマがパンチを食らわせ、
まじかる☆ラウラ「おおおおっ！」
　剣撃を喰らわせるラウラ。
　×　×　×
《Ｃ》「ち……」
　《Ｃ》は皇子に狙いを定めようとするが、
　混戦の中で撃つことが出来ないままだ。
　×　×　×
ミリアム「へえ！　強いねー」
　ジャングルジムの上に立って観戦モードのミリアム。
ミリアム「オウジも形無しじゃない？」



　見やると、皇子、体から黒いオーラが溢れ出して、
魔界皇子「ぐううっ……！」
　苦しみながら――その脳裏に。
　×　×　×
　魔王のシルエットや。
　ミリアムら部下の姿が浮かぶ。
　×　×　×
魔界皇子「うおおおおっ！」
　その隙に、突っ込んでくるアリサとラウラ。
まじかる☆アリサ「やあああああっ！」
　皇子に蹴りを放ち、
魔界皇子「ぐっ！」
　喰らって吹っ飛ばされる皇子。
まじかる☆ラウラ「観念せよ」
　ビシッと剣を突きつけるラウラ。
魔界皇子「……！」
　追い詰められる皇子。
まじかる☆ラウラ「世情を惑わし、町を破壊するなど悪事の数々……。このまじかる☆ラウラが成敗してくれるっ！」
　剣を振り上げる！
ミリアム「あーあ。助けるかな」
　ミリアムがボヤいた時、
ユーシスの声「シュトラーール！」

ミリアム「！」
　馬のいななきと共に、シュトラールに跨がった魔界貴族ユーシスが、緑のマントをはためかせ颯爽と現れる。
ラウラ「ぬ！」
　ユーシス、ラウラに馬上からフェンシングの剣撃を繰り出し、
ユーシス「はあああっ！」
ラウラ「くっ！」
　咄嗟のことに対応できず、喰らって後ずさるラウラ。
ラウラ「お主、やるな……」
　ユーシスを見やるラウラ。
魔界皇子「お、お前はっ……！」
　だが、それよりも先に、
ミリアム「ああっ！　ユーシスだー！　ひさしぶりーっ！」
　笑顔のミリアムが、馬に跨がったユーシスの脚に抱きついた。
ユーシス「くっ……離れろ馬鹿者！」
ミリアム「えー！」
まじかる☆アリサ「ま、また出たわね！」
ユーシス「！　……」
　ユーシス、アリサの胸のチョーカーの下で、ペンダントの宝石が赤く輝



いているのを見やって、

ユーシス　「力の波動に引かれて来てみれば……。なるほどな」

ビッと剣をアリサに向けて、

ユーシス　「それが皇子の印だな……！」

まじかる☆アリサ　「え⁉」

ユーシス　「行くぞ……！」

シュトラールと共に突進するユーシス。

魔界皇子　「くっ……」

後方で見守っている皇子。

×　×　×

《C》　「……」

狙撃銃の狙いを皇子に定める《C》。

×　×　×

まじかる☆アリサ　「きゃあっ！」

ユーシス、馬上からの一撃でアリサを吹っ飛ばす！

まじかる☆エマ　「アリサさん！」

まじかる☆ラウラ　「おのれっ！」

怪物　「アシハポーン！」

エマとラウラは必死に怪物と戦っている。

倒れて動けないアリサ。

まじかる☆アリサ　「ううっ……」

魔界皇子　「……！」

その様子を見つめる皇子。

ユーシス　「皇子の印、もらいうけるぞ！」

手綱を引き、アリサに剣を突きつけるユーシス。

まじかる☆アリサ　「（顔を上げ）な、なんなのよ……。皇子の……印って……」

魔界皇子　「！　ぐ……！」

アリサの胸の宝石を見つめる皇子。

その右手の宝石が黒く輝く。

ユーシス　「貴様に答える必要はない！」

剣を振り下ろそうとした時である！

魔界皇子　「ぐううっ！」

皇子の宝石と、アリサの宝石が呼応したように輝いて……！

×　×　×

フラッシュバック――

――教室での笑顔のアリサ。

――先程のホウキに乗ったアリサに下敷きにされた時の姿。

――さらに、幼い頃のアリサの姿が、一瞬だけ蘇る。

×　×　×

皇子、わずかに記憶を取り戻し、アリサを見やる。

魔界皇子　「（M）あ、あいつは……まさか⁉」

咄嗟に、立ち上がる皇子。

魔界皇子「やめろっ……！」
ユーシス「なに⁉」
　皇子の命令に、思わず剣を止めるユーシス。
魔界皇子「奴は……まじかる☆アリサは、我が永遠のライバル。奴にとどめをさすのは我の役目！　手出し無用だ！」
　そう言い、ユーシスの前に立ちはだかる魔界皇子。
　×　×　×
《C》「ほう……」
　《C》、その様子に銃の引き金にかけた手を止める。
　×　×　×
まじかる☆アリサ「え……！」
　驚くアリサ。
　魔界皇子が自分を庇ってくれているように見えて――。
怪物「（戸惑い）アシハポン⁉」
　動きを一瞬止める怪物。
まじかる☆ラウラ「今だ！」
　剣を構えるラウラ。
まじかる☆エマ「ええっ！」
　杖を構えるエマ。
まじかる☆ラウラ「アルゼイドが秘剣、篤と見よ！　奥義・洸刃乱舞！　はあああっ！」

怪物「アシハポンッ！」
　猛烈な剣撃を喰らわせるラウラ。
　怪物の足が切り落とされる。
　さらに、エマが杖を振り上げて、
まじかる☆エマ「そびえ立て、巨いなる塔！」
　怪物を取り囲むように現れる四本の塔。
まじかる☆エマ「ロードアルベリオン！」
　その中心部から魔法の光が飛び出して、怪物を包み込む。
怪物「アシハポーンっ！」
まじかる☆エマ「静かに眠って下さい」
　浄化されてタコの滑り台に戻る怪物。
　ラウラとエマ、ダッと素早く、アリサの所にジャンプしてきて、
まじかる☆アリサ「二人とも……！」
まじかる☆ラウラ「待たせたな！」
まじかる☆エマ「大丈夫ですか⁉」
　身構える三人。
　魔界皇子、その様子に、フッと笑うと、
魔界皇子「フ……。まじかる☆アリサよ、命拾いしたようだな……！」
　バッとマントを翻すと、
魔界皇子「行くぞ！　我が友、魔界貴族よ！」



ユーシス「！　――」
　その言葉に、ハッと驚きの顔になるユーシス。
魔界皇子「次こそは、貴様らを煉獄の冥府へと叩き落としてくれるわ！　ククク！　ハアアアッハハハハ！」
　高笑いしながら去って行く魔界皇子。
ユーシス「まったく、阿呆が……」
　フと、小さく微笑み、手綱を引くと、皇子の後に続いて行くユーシス。
　×　×　×
　ビルの屋上では――いつの間にか《C》が姿を消していて。
　×　×　×
　変身が解けたアリサ達。
アリサ「いったい、何だったのかしら？」
ラウラ「まあ、ともかく」
　ミリアムの方を振り向くと、
ラウラ「てぃんくる☆モナくんを返してもらうぞ！」
　と、竹刀を持って迫るラウラ。
モナ「モ、モナ！」
　相変わらずモナくんは鳥カゴに捕まったままで、
ミリアム「ニシシ！　やだよーっ！　またねーっ！」

　と、ミリアムが樹の上にジャンプして、撤退しようとしたとき――。いきなり手裏剣が飛んできて、ミリアムの腕に命中。
ミリアム「あいたっ！」
モナ「モナっ⁉」
エマ「え⁉」
ラウラ「手裏剣っ⁉」
　放り出されたモナくんの鳥カゴを素早い動きで空中でキャッチしたのは――。
　なんと、ネコミミ姿の少女だった。
ミリアム「ちぇっ！　またねーっ！」
　そのまま去って行くミリアム。
少女「あーあ。逃げられちゃった……」
　驚くアリサ達の前にスタっと着地する少女。
アリサ「あ、あなたは⁉」
フィー「私はくのいち、フィー。一緒に魔界を滅ぼさない？」
　Vサインして、いきなり怪しい提案を持ちかけたところで――。
〈つづく〉

# FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

**『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ**

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！ ※絵柄はランダムです。

**ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/**

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.133プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）

2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から１つずつ）

3：アンケート①一緒にお花見をしたい『黎の軌跡』のキャラクターは？
　アンケート②来月から41周年目がスタート！　今後に期待することは？

4：希望するプレゼント番号

5：ご意見・ご感想など

### 記事一覧

1：も～っと集まれ！ファルコム学園
2：英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～
3：創の軌跡　THE MISERABLE SINNERS
4：ファルコムニュース
5：暁の軌跡最新情報
6：魔法少女まじかる アリサ 決定稿

**応募締め切り　3月29日（火）**

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。







# 月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.133


発行人　田中一寿

発行協力　日本ファルコム株式会社

編集　小渕智幸
河野崇

デザイン・DTP　株式会社 ACQUA

表紙ロゴデザイン　荻窪裕司（デザインクロッパー）

発行　株式会社フィールドワイ
〒101-0062
東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F
TEL 03-5282-2211（代表）
http://www.field-y.co.jp/